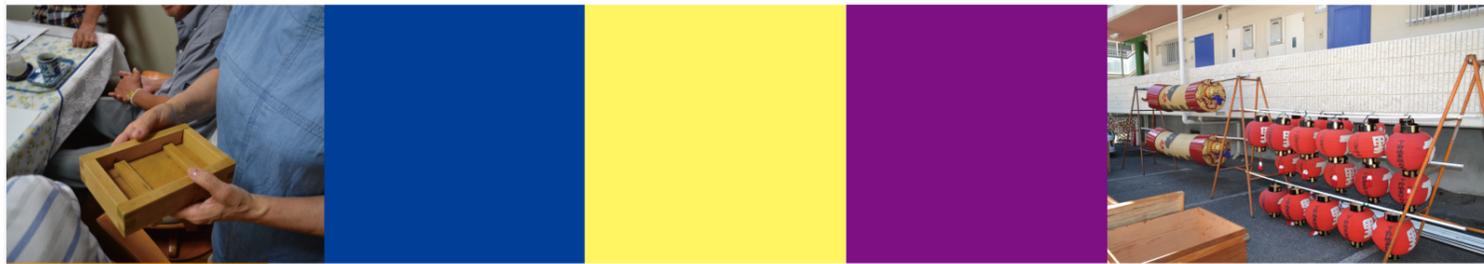




文化庁 平成 27 年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業



だんじりを活かした地域共働事業実行委員会報告書II 「だんじりの記録、だんじりの記憶」



平成 28 年 3 月

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会



ごあいさつ

本書は、平成 27 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業）を得て実施してきた事業について、その可能性と拡がり进行期待し、報告するものです。

本事業は、「だんじり」をキーワードとして、大東市立歴史民俗資料館、原野農芸博物館、京都造形芸術大学、大東市教育委員会、大東市立歴史民俗資料館市民学芸員連絡会がそれぞれの立場から博物館活動に関わってきました。

平成 26 年度には、「小松源助」というだんじりの彫物師に焦点を当てた活動を行ってきました。平成 22 年度の奄美豪雨によって被災した原野農芸博物館では、京都造形芸術大学で文化財修復を学ぶ学生が、はやくから土砂の除去、資料の救出といった復興作業を支援してきました。そのなかで、土砂に埋もれた資料から「小松源助」銘のあるだんじりが発見されました。

また、大東市教育委員会では、平成 24 年度の調査において中之町地車保存会所有のだんじりに「小松源助」銘があることを確認していました。また大東市立歴史民俗資料館では、平成 25 年度より市民学芸員とともにだんじりに関わる調査・展示を行ってきました。これらの経緯により、平成 26 年度には、市民学芸員・学生・地域とともに、だんじりの彫物を対象とした調査・展示といった博物館活動を展開してきました。

平成 27 年度には、彫物に限らず、だんじりまつりを「記録」と「記憶」に残すことをテーマとして活動を展開してきました。だんじりまつりは、だんじり本体である「モノ」とそれを曳行する「ヒト」によって成り立っています。そこで、だんじりまつりを後世に伝えていくために、だんじりという「モノ」を写真によるトレース測量、3D 測量やデジタルデータとして保管するアーカイブ化の技術によって「記録」してきました。本年度は、実行委員会に加えて、外部から奈良大学の協力を得て、クリーニング・計測・アーカイブ化の作業を発展させてきました。

また、だんじりまつりを支える人々については、大東市立歴史民俗資料館市民学芸員が聞き取り調査を行い「コトガラ」としてまとめました。改めて聞かれることで人びとの「記憶」を呼び起こし、展示や報告書として人に伝えることで新たな「記憶」として蓄積されていければと考えます。

最後になりましたが、本事業を実施するにあたり調査にご協力いただいた関係機関、各位に厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月 31 日

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

笠井 敏光

目次

ごあいさつ

目次・凡例

はじめに

第1部 だんじりの記録

第1章 だんじりの保存活動 ～2015年9月2日～9月5日～	4
第2章 写真を利用した破損部材の位置特定	6
第3章 人材育成	8
第4章 原野農芸博物館所蔵だんじりのデジタル・アーカイブ	10
第5章 3D計測によるだんじり彫刻の比較調査	20
第6章 写真トレースによる構図比較	30
第7章 だんじりにまつわる文字史料	37

第2部 だんじりの記憶

第1章 市民学芸員の調査・展示	42
第2章 「だんじりの記憶—大東市内のだんじり」	48
第3章 「だんじりの記憶—だんじりの暦」	50
第4章 「だんじりの記憶—だんじりの思い出」	55
第5章 展示について	88
おわりに	89
謝辞・執筆者紹介	90

凡例

1. 本書は、だんじりを活かした地域共働事業について、展示「だんじりの記録、だんじりの記憶」の内容を編集し、報告書としたものである。
2. 特に記載がない限り、執筆はだんじりを活かした地域共働事業実行委員会が行った。
3. 表紙のデザインについては京都造形芸術大学学生 大野木喜世が行った。
4. 本文中のイラスト、レイアウトは大東市立歴史民俗資料館 森井綾乃による。
5. 「だんじり」は、「地車」とも表記されるが本書では、「だんじり」の語で統一をした。

はじめに

◆趣旨

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会は、「だんじり」を活かした地域共働の促進・地域と博物館の連携強化を図ることを目的としています。

本事業の目的の一つは、原野農芸博物館所蔵だんじりの資料化・アーカイブ化の作業を行うことで、被災した文化財の新たな保存管理手法の開発を行っていくことです。

二つ目には、地域の保存会等の協力のもと比較調査を行い、その地区の「彫物」の特徴を明らかにし、報告書として「地域」に還元することで、「地域」との共働による地域文化活動につなげます。

三つ目には、調査に同行した市民学芸員が「だんじり」「彫物」の展示や関連事業を考えることで、地域に存する文化財を活用するためのコミュニティーを形成し、「だんじり」「彫物」の魅力を広く発信することを目的としています。

◆事業概要

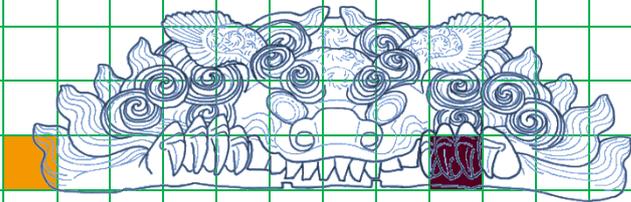
まず、原野農芸博物館では、文化財学を専門とする京都造形芸術大学の学生が中心となり、未だ整理されていない彫物について整理、クリーニングを行い、資料化を進めます。一部資料については、3D測量等の可能性を検討するため、大東市立歴史民俗資料館へ搬送します。残りの部材については、写真撮影をはじめとするアーカイブ化の作業を奈良大学の協力を得て行います。

並行して、地域のだんじりに対して比較調査を行います。地域の協力を得ながら、写真・トレース・計測等の調査を行い、最終的には原野農芸博物館所蔵だんじりとの比較分析を行い、報告書とします。

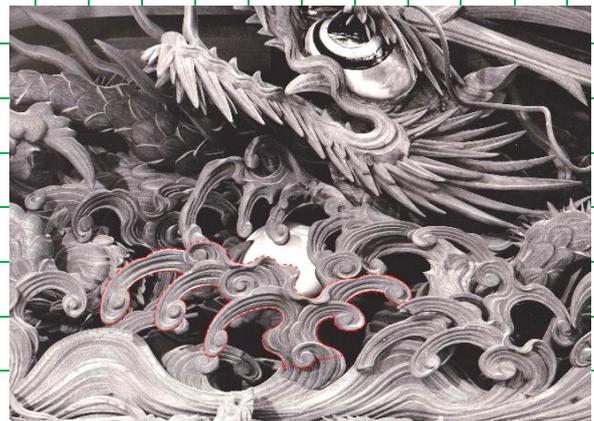
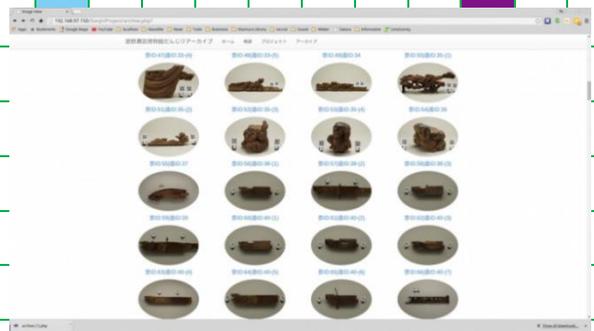
市民学芸員は、必要に応じて地域での調査に同行し、学芸員とともに「だんじり」の魅力を周知するための展示や展示関連事業を企画します。展示関連事業では、「だんじり体験」や「だんじり見学会」といった事業が想定され、「展示」と「地域」を結ぶ取組を行います。

◆だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

委員長	笠井敏光	大東市立歴史民俗資料館館長
副委員長	原野耕三	原野農芸博物館館長
委員	大野木啓人	京都造形芸術大学副学長
委員	伊達仁美	京都造形芸術大学教授
監事	黒田淳	大東市教育委員会生涯学習課参事
事務局長	小西立也	大東市立歴史とスポーツふれあいセンター副館長
事務局	武井二葉	大東市立歴史民俗資料館副館長
事務局	溝辺悠介	大東市立歴史民俗資料館学芸員



第1章 だんじりの記録



だんじりの保存活動 ～2015年9月2日～9月5日～

伊達 仁美

はじめに

2010年10月20日に奄美地方を襲った集中豪雨で奄美文化財団原野農芸博物館は甚大な被害を受け、裏山からの土石流で展示場や収蔵庫が資料ともども押し潰され、その中に重さが数トンもあるだんじりも含まれていた(写真1,2)。収蔵資料のうち、いわゆる民俗資料は、「博物館機能の再開」を目標に3年間におよぶ支援活動を行った結果、規模の縮小はあるが2013年12月に「復興記念展」を開催することができた。しかし、被災資料の整理作業が終息に近づき復興記念展の開催に至ったが、大型のだんじりは、破壊が著しく土の中に埋もれた部材を掘り起こしたまま、手つかずの状態が続いていた。そこで、京都造形芸術大学歴史遺産学科で民俗文化財の保存修復を学ぶ伊達ゼミの学生たちが、本学保護者会である蒼山会の制作・研究助成制度を利用し、2013年9月からだんじりに特化した復興支援計画を新たにたて、活動を始めた。



写真1, 2 被災しただんじり

1. だんじり保存修復作業の経緯

本学保護者会蒼山会の制作・研究助成制度を利用した活動は、2期にわたり、どちらも伊達ゼミの学生たちで構成されている。1期目は、博物館の職員により土砂の中から掘り起こされた破損しただんじりの部材を1点ずつ応急的なクリーニングを行い、本来取り付けられていた場所の特定をする活動を行った(写真3,4)。その結果、大量の部材や破片の中から明治に活躍した彫師「小松源助」の銘がある部材を発見した。もともとのだんじりは、大阪府中河内郡枚岡村(現東大阪市)で曳行されていたものであり、地域的にも近接している大東市にも小松源助銘のだんじりがあることが分かった。このことから、昨年度の事業である文化庁「平成26年度文化芸術振興費補助金(地域と共働した美術館・博物館創造活動支援事業)」により、小松源助をキーワードにだんじりの歴史的な位置づけなどを行うことができ、2015年2月～3月には大東市立歴史民俗資料館と大阪府豊中市のギャラリーA.1の2ヶ所で展覧会を開催することとなった。

また今年度は 2015 年 9 月に大東市立歴史民俗資料館で「だんじりの記録、だんじりの記憶」として展示が開催された。



写真3、4 だんじりの部材がわかるものから収蔵庫に移動し、位置の特定をした

2. だんじりの保存修復作業

今年度は、現地に残っていた彫刻のある部材を中心にクリーニング作業を行った。作業を行う前に全員でミーティングを行い、本作業の責任者である学芸員の溝辺悠介氏より、作業の段取りや注意事項が伝達された(写真5)。破損部材の取り扱いやクリーニングの方法については、伊達が指導した。



写真5 作業前のミーティング

彫刻部材は、破損や折損しているものと、部材同士が組まれていた部分が外れたものに分けることができる。どちらも土石流の衝撃により起こっているものである。土砂が付着した状態ではわからないが、部材同士が組まれている箇所については、だんじり大工が組み立てる時の符号が記されているものがある。また、彩色のある部材や人物や動物の目にガラスが用いられ、それが割れたことにより中の綿が出ているもあり、処理前の観察を十分に行なう必要があった。



写真6 表面の汚れの除去

彫り物のある部材はその窪み部分に細かい土砂が入り込んでいた。特に小松源助の彫り物は彫りが鋭く、そこに入り込んだ土砂は乾燥して白く目立ち、彫り物の美しさを損ねていた。また、本事業の一つの目的である他の地域の小松源助作といわれる彫り物を比較する上で、計測の妨げとなることが懸念された。そのため、取り除くことが必要であった。

部材に付着した土砂は、まず全体を柔らかい刷毛や筆、ブラシでクリーニング(写真 6,7)した後、乾燥し硬化している土砂を除去するため、水洗いによるクリーニングを行った。部材の中には前述したように墨書が記されているものや彩色のあるものがあり(写真 8)、それらは、経年により墨に含まれる膠や彩色の際に用いられる膠の接着力が低下し、非常に脆弱な状態になっていることが考えられる。そのため、刷毛やブラシで擦ることにより、剥落するおそれがある。ホースから出る水を直接使うのではなく、各自が水をペットボトルに入れ、少しずつ垂らしながらクリーニングを行った(写真 9)。ガラスが割れ、中の綿が出ていた部分は、綿が濡れないようビニールテープで養生をした上で、水を流すのではなく、拭き取りによるクリーニングを行った(写真 10)。これは、中に水分が入ると綿が水分を吸って乾燥しにくくなりカビの発生が懸念されるためである。

以上のクリーニングが終了した部材は、直射日光が当たらず、風通しの良い場所で乾燥を行った(写真 11,12)。



写真7 彫刻の中に入り込んだ土汚れ



写真8 彩色のある部材



写真9 水を少しずつ垂らしながら
クリーニング



写真10 拭き取りによるクリーニング



写真11、12 風通しの良い場所で乾燥

おわりに

このように彫り物のクリーニングについては、順調に進んでいたが、この段階でもだんじりを象徴する大屋根や小屋根、コマがついたままの台車など大型の部材や土呂幕など下の方の部材は土に埋もれていたため、泥の付着が著しく、未着手の状態で見られていた。そこで2期目の活動として本事業とは別にそれらのクリーニングを行っている。また、台車部分には部材を固定するための鉄製のボルトなどがあり、それらの防錆処理も同時に行っている。

参加した学生は、授業の実習で行っていることを実際の現場で応用し、限られた時間と道具で工夫しながら作業を行っていた。その結果、この一連の作業により、部材の状態を見極める力が付いた。これは、その後の自分たちの活動である大型部材の保存修復を行う際に、毛先の大きさや硬さが異なるブラシや刷毛を自ら選んで購入したり、堅牢な部材には高圧洗浄機を用いたり、現場での応用力やグループで作業を行う際のコミュニケーション力が付いた(写真 13,14)。



写真13、14 大型の部材に対する保存修復(京都造形芸術大学蒼山会研究助成による活動)

写真を利用した破損部材の位置特定

福原凡香

原野農芸博物館で平成22年に被災し解体されただんじりは、屋根や柱などの主な構成部材から破損した彫物の小さな破片まで含めると、現在数百点にも及ぶ資料として収蔵されている。平成25年度から部材のクリーニングや整理作業が京都造形芸術大学の学部生を中心にして行われ、被災からの復興とだんじり研究のための資料化が進められてきた。

だんじりには龍や麒麟・獅子などの動物や牡丹などの植物、武者などの彫物があり、主な彫物を構成する大きな部材については位置特定が終了しているが、小さな部材については「位置不明部材」としてまとめて収蔵されている。しかし、だんじりの損傷規模や彫物の詳細を調査するためにも部材の位置特定は必要であると考え、彫物の部材を中心に特定作業を行った。

1. 写真を利用した部材位置の仮定

彫物部材の確認に利用しているのが、博物館にだんじりが寄贈されてから被災するまでに撮影された写真群と、被災後の整理作業で部材を一点ずつ撮影した写真である。残念ながら博物館にはだんじりの詳細な設計図や調査図面が残されていないが、被災前の姿は博物館に残る写真によって様々な角度から確認することができる。

まず古いプリント写真はデジタルデータに変換し、細部の確認に必要な写真の調整や拡大などを簡単に行えるようにした。この写真データを使い彫物を観察すると、彫物は立体的に表現するため、大小様々な部材を釘や接着剤で接合している部分が数多くあることがわかった。

位置不明の部材写真は、植物の葉や波など形状によって大まかなグループ分けを行い、彫物の一部と考えられる部材を探しやすくした。彫物全体と部材の写真を並べ、形状や釘跡などの細部を見比べながら、部材の位置を仮定していく作業を行った。



写真1 整理用タグが付いた部材

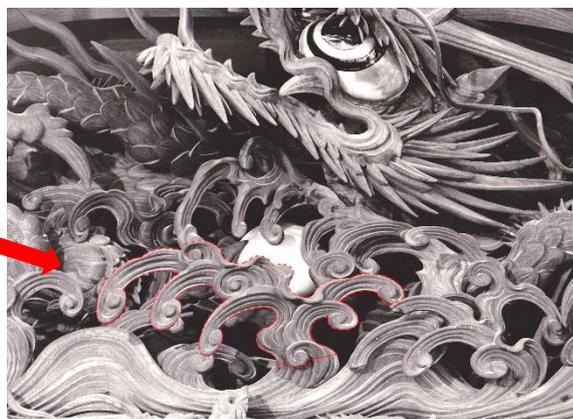


写真2 仮定の位置

2. 実際の部材による位置の特定と記録

写真を利用して位置を仮定した部材は、実際に接合するとと思われる部材同士を合わせ、釘跡や接着面、破損断面が一致するか確認しながら位置を特定した。

位置特定ができた部材は部材地図を作成して記録する。現在バラバラの状態で見られている部材は、一見するとどこの部材か把握が難しくなっている。被災前の写真などを利用し、部材の形状と整理番号を記入した部材地図を作成することで、彫物を構成する部材を把握し、整理作業や調査などで必要な部材を選び出すことが視覚的に簡便になる。



写真3 破損部材同士の接合部確認



写真4 部材地図の一例

3. 作業の効果と課題

写真を利用した部材位置特定は、設計図などが無い今回のような状況においては有効な方法の一つだと思われる。そして、この作業を可能にしたのは、博物館がだんじりを大阪から奄美へ移送したときの作業写真など、通常保管しているだんじりでは陰になって観察が難しい彫物の細部が撮影された写真が残っていたことであった。これらの写真との照合によって、被災しただんじりは多くの部材が流失や廃棄を免れたことがわかってきた。

しかし、写真で確認できる部材には限度があり、写真で確認ができない位置不明の部材については、形状や破損断面から判断して接合するものを探し出す作業となる。今後は、彫物の形状に類似性が見られる大東市内のだんじりと比較し、彫物配置の検証なども行いながら、より多くの部材が位置特定できるよう作業を進めていきたい。

【参考文献】

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会『だんじりを活かした地域共働事業報告書』株式会社アステム(2015)

1. はじめに

だんじり部材を資料化するために、2010年の集中豪雨で被災した後、一次避難のみがおこなわれ、泥などが付着したままの状態でも保管されていた資料のクリーニング作業を、2015年10月10日から5日間、奄美大島の原野農芸博物館において実施した。作業にあたったメンバーは、奈良大学文学部文化財学科保存科学ゼミの3、4年生の中から被災文化財の救済活動に強い関心を持つ4名を選抜した。学生たちは、座学として文化財保存の理念や基本的な取り扱い方、クリーニング等について学んではいるが、実際に災害で被災した文化財を、現場で、自分の力でクリーニングするなどということはまったく初めての体験であった。

学生たちと被災した資料を前にしてクリーニングの目的や方法について説明し(写真1)、実際に作業に入ると、これまで想像もしたことがないほどに汚れて破損してしまった文化財を目の当たりにしたせいもあってか、当初はまったく作業がはかどらなかった。それでも見様見真似でなんとかクリーニングを終えた資料を点検し、うまくクリーニングできていない点を指摘してコツを伝えていくうちに、彼らはみるみる技術を習得し、クリーニングのスピードをあげていった(写真2)。

2. 実地に学ぶことの意味

教室での授業には限界もあり、限られた時間の中で、すべての学生に知識や技術を完全に習得させることは決して容易ではない。

ごくわずかな人数ではあるが、今回のように文化財の現場で求められていることを、与えられた時間と材料の中で創意工夫しながらこなすという“実習”は、参加した学生たちにとって間違いなく大きな経験になったことと思う。

以下に、参加した学生がまとめた文章の一部を抜粋して掲載する。拙い文章だが、学生たちが文化財に触れながら感じたことをそのまま感じとっていただきたい。



写真1 被災資料を前に作業の打ち合わせ



写真2 協力して大きな資料を洗浄する様子

今回の奄美大島でのクリーニング作業を終えて、自然災害で被害を受けた文化財のクリーニングや、データを取ることがまだまだ足りていないし、それに対する関心も少なく人手が足りていない現状を直接体感することができた。文化財の防災や被災資料の救済についての知識は少なくとも何か手伝えることはあると思うので、またこのような機会があれば積極的に参加したいと思う。(文化財学科3年 鎌谷涼平)

奄美大島での文化財レスキューの活動は、今まで自分が想像していたものと比べてかなり大変だと感じた。作業する中で、被災した文化財を見て改めて自然の脅威を感じた。大学で勉強しているだけでは知ることのできない多くのことを、この活動を通して体験でき、その中で、自分がまだまだ知識や経験が足りないことに改めて気づくことができた。改めて現地現物主義の意味の重要性を考えることができた。このような貴重な体験をさせていただいたことに感謝し、この体験を忘れずにこれからも文化財についてより深く学んでいこうと思う。(文化財学科3年 赤木勁太)

奄美大島での被災文化財の洗浄作業を通して、情報は現地に行かなくても手に入れることはできるが、自らの足でその場へ赴き・見て・聞いて・体験することの重要性を再認識した。文化財について学ぶ基礎として教わってきた「現地現物主義」を実行することができた貴重な体験であった。(文化財学科3年 田口沙穂)

今回のクリーニング作業では、丁寧に作業を進めることと、決まった時間内に作業を行うことの両方が必要であった。そのため、作業に参加している仲間との協力が欠かせないものであると感じた。そして、被災した文化財のために、自分たちのできることをしていく大切さを改めて認識することができた。(文化財学科4年 藤井佐由里)

3. 人材育成としての位置づけ

今回、学生を同行して、被災した資料のクリーニングをおこなって、これまで文化財として認識されなかった泥まみれの木材を文化財として認識してもらい、資料化する作業の一端に関わられたことを嬉しく思う。今回の作業に参加した学生のその後の活動を見て、この事業が持つさまざまな意味のなかに、人材育成としての位置づけも大きく取り上げてよいのだろうと強く感じている。

将来、直接的であれ、間接的であれ、文化財の持つ価値を十分に認識したうえで、文化財の保存に取り組む人材、あるいはその必要性を理解し、地域社会で文化財に関わる社会人を育てることに大きく貢献していることは間違いないだろう。

今後も、このような機会を活かして、文化財の保存に理解を持った人材の育成に努めたいと思う。

原野農芸博物館所蔵だんじりのデジタル・アーカイブ

藤本悠・堀内保彦

1. はじめに

2015年10月10日～15日にかけて、奈良大学文学部地理学科とNPO法人フィールドは、原野農芸博物館の被災だんじりのデジタル・アーカイブを行った。今回のデジタル・アーカイブ作業では、多くの制約の下で最大限の成果を出すことが求められた。特に、限られた予算と時間の中で最大限の成果を上げるためには、様々な観点からプロジェクトの設計が必要であった。

まず、今回のプロジェクトで重要な課題となったのは、1. デジタル化のための機材の選択、2. 限られた状況での撮影環境の確保、3. 現場での作業とデジタル化後の整理作業の効率化、4. 長期的な保存を可能とする情報管理方法の確立、5. 持続的なデータの利活用を可能とする基盤構築、の5つの課題であった。これらの要件は、今回のプロジェクトに限らず、大規模な災害が発生した際のガイドラインを考える上でも重要なテーマである。例えば、「東日本大震災」では、災害発生後に様々な研究機関やNPOなどが被災文化財の調査を行ったが、この時に収集された情報は断片化され、個々の組織が個別の方法で管理されているのが現状である。こうした背景もあって、今回のプロジェクトでは、単に原野農芸博物館が所蔵している被災だんじりのデジタル・アーカイブを行うというだけではなく、災害で被災した文化財の情報収集のガイドラインにも関わるものとなった。

2. 機材の検討について

デジタル・アーカイブを行うための機材には様々なものが存在し、専用の機材を使用したり、場合によっては、特注の機材を用いることもある^{*1}。しかしながら、そうした機材は一般的に非常に高価であり、デジタル化に要する時間やデジタル化したデータの処理に高負荷がかかるという問題がある。また、技能面においても、こうした特殊用途の機材を使いこなすには高い技術を要する。こうした技術的な問題に加えて、調査対象となる資料の特性が実際に調査を行うまで不明であるという問題もある。例えば、災害発生後の文化財レスキューでは多種多様な資料を同時に対象とする必要があり、そうしたケースでは対象資料に特化した機材をすべて揃えることが極めて困難である。これらの問題に対して、デジタル・カメラは、どこでも入手が可能な汎用的なデジタル機器であり、最も手軽に資料の情報をデジタル化できる機材である。こうした理由から本プロジェクトでは、特殊な機材を用いずにデジタル・カメラによる画像・デジタル・アーカイブを試みた。

まず、表1にまとめたように、デジタル・カメラと一口でいっても様々な種類が存在し、価格や機能も大きく異なるため、最初に本プロジェクトでの妥当なデジタル・カメラについて検討する。本プロジェクトは資料の大きさも様々で、場合によってはカメラ位置を非常に高い位置に設置する必要もあったため、レンズの選択肢が広く軽量なカメラが必要で

表 1: デジタル・カメラの種類と特徴

種別	価格帯の目安	特徴
スマートフォン	持っていれば、購入不要	緊急時や一時的な記録では、限界はあるが実用的な選択。
コンパクト・デジタル・カメラ	10,000 円～100,000 円	1in センサー搭載であれば運用可能。
ミラーレス一眼カメラ (MILC)	50,000 円～150,000 円	コスト、性能、携帯性のバランスが良く、レンズの選択肢も広い。
一眼レフカメラ (DSL)	50,000 円～500,000 円	MILC と比較して、高価で、重くて、大きい。
業務用カメラ	10,000,000 円程度	非常に高価で、操作が複雑であるため緊急性の高い用途には不向き。

表 2: 撮影時のカメラの設定

カメラ本体	SONY A6000
レンズ	Sigma Art 30mm F2.8 DN / Sigma Art 60mm F2.8 DN
ISO 感度	ISO200
測光モード	分割測光
絞り	F5.6 ~ F9.5 (対象に依存)
保存形式	JPEG + RAW
カラースペース	sRGB
光源	蛍光灯による定常光

あった。

一般的な一眼レフカメラは、重量の問題があり、高い位置からの撮影を行うためには、ミラーショックなどの微振動制御するためにも、重量のある三脚が必要になるなど、カメラ本体以外のコストと、運搬時の負担が増加する。また、レンズに関しても全体的に高価であるため、トータル・コストと性能のバランスは決して良いとはいえない。そこで、本プロジェクトでは、いわゆるミラーレス一眼カメラ (MILC: Mirrorless Interchangeable Lense Camera) の SONY α6000 を使用し、15,000 円程度の最低価格帯である Sigma Art 30mm F2.8 DN と Sigma Art 60mm F2.8 DN を使用した。撮影時のカメラの設定に関しては、ポスト・プロダクションで適切な色を再現するために、反射率 18% のグレーカードを用いた。設定は、カメラのホワイト・バランスをマニュアルで設定し、撮影シーンごとに設定した*2。また、その他の設定として、カメラの日付と時間の確認、撮影に使用する SD カードのフォーマット、ファイル番号のリセットを行った上で撮影作業を行った。その他の基本設定は、表 2 に示した通りである。三脚に関しては、大きい資料を撮影する際にある程度の高さにまで安定して高く上げることができ、小さな資料の撮影の際には、水平に据えて真上から撮影ができるように設置することが可能な三脚が必要であったため、これらの要件を満たす機材として、ManfrottoMK290 3Way 雲台キットを使用した。

本プロジェクトで用いたデジタル化のための機材は、決して特殊な機材ではないが、地

理学におけるフィールド調査や、考古学における遺跡の分布調査でも十分な能力を発揮する機材である。目的に応じて専用の機材を使用することも重要であるが、汎用的に利用できる一般的な機材を用いることは、現場で求められる技術力を最低限に抑えることもでき、結果として迅速かつ安定したデジタル化の作業が行うことが可能となる。また、現場で機材が故障した際にも、故障・消耗した場合の補充や交換が可能な点も大きな利点である。実際に、今回のプロジェクトでは、上記の機材を2セット準備し、四名のスタッフで約300点の資料を実質作業3日で撮影し終えることができた。

3. 簡易撮影スタジオの設営と撮影方法について



写真 1:簡易のDIY 撮影スタジオ

理想的には、博物館や美術館の撮影スタジオを利用すべきであるが、今回のプロジェクトでは、災害で被災した博物館での作業であったため、そうした理想的な環境での撮影作業を行うことができなかった。そのため、最初の2日間は撮影を円滑に進めるための資料の整理と、撮影スタジオの設営から始めることになった。

カメラの機構上、資料のサイズに応じてカメラ位置を変えるとその度にレンズ交換や絞りの設定、光源の設定などを行う必要があり、作業効率が大きく低減する。今回のプロジェクトのように、多種多様なサイズの資料を撮影する際には、大きさ順で資料を並べ替えることで作業効率が向上する。本プロジェクトではこの準備に加え、2セットの機材を準備し、被写体サイズごとに2箇所撮影作業を行うことによって飛躍的な作業効率の向上を図った。

次に、簡易な撮影スタジオの設営では、現地で入手した角材とベニヤ板を使ってディ



写真2:撮影成果の一例

フューザー・フレーム、レフ板、ハレーションカット板、遮光板を作成した。ディフューザー・フレームについては、拡散材に大判のトレース紙を3枚重ねて使用した。また、遮光板に関しては、二枚のベニヤ板を蝶番でつないで衝立型のものを作成し、各撮影セッティングの光が互いに干渉しないように配置した。ディフューザー・フレームと遮光板は、資料の大きさや形状に合わせて、編成を組み換えながら使用した(写真1)。

今回のプロジェクトにおいて、最も大きな課題となったのは「光源」であった。今回の試みでは、照明についても汎用的な設定方法を検討し、専門的な知識が必要なスタジオ用ストロボは使用せず、定常光のみを使用し、一つの資料に対して2カットずつ撮影を行うことにしたが*3、準備していた撮影用照明の3セットでは光量が十分ではなく、理想的な光量を得ることが困難であった。さらに、撮影二日目には、そのうちの1灯が点灯しなくなるというトラブルが発生した。

点灯しなくなった蛍光灯の代替には、ホームセンターで入手可能な一般家庭用の電球型蛍光灯を用いた。実際に使用した蛍光灯は、3波長型の昼光色タイプ(演色性表記は Ra93、色温度 6500K の蛍光灯)で、実際の撮影では、4200K で撮影光源の色温度を統一することができた。本来であれば、色の再現のためにも、専用光源を準備する必要があるが、今回のプロジェクトでは、やむなく現場で入手可能な機材を活用して対応した。しかしながら、結果として得られたデジタル画像には目に見える破綻は見られず、逆に、使用できる光源の幅が広がった(写真2)。今後は、電球の選択によって、どのような影響が出るのかについての検証が必要であるが、使用できる光源の幅が広がるということは、現地で低コストのデジタル・アーカイブを行う際の強い制約の一つが解消されることを意味し、現地で行うことができる作業の幅も広がることになると考えられる。

3. デジタル・ワークフローの検討

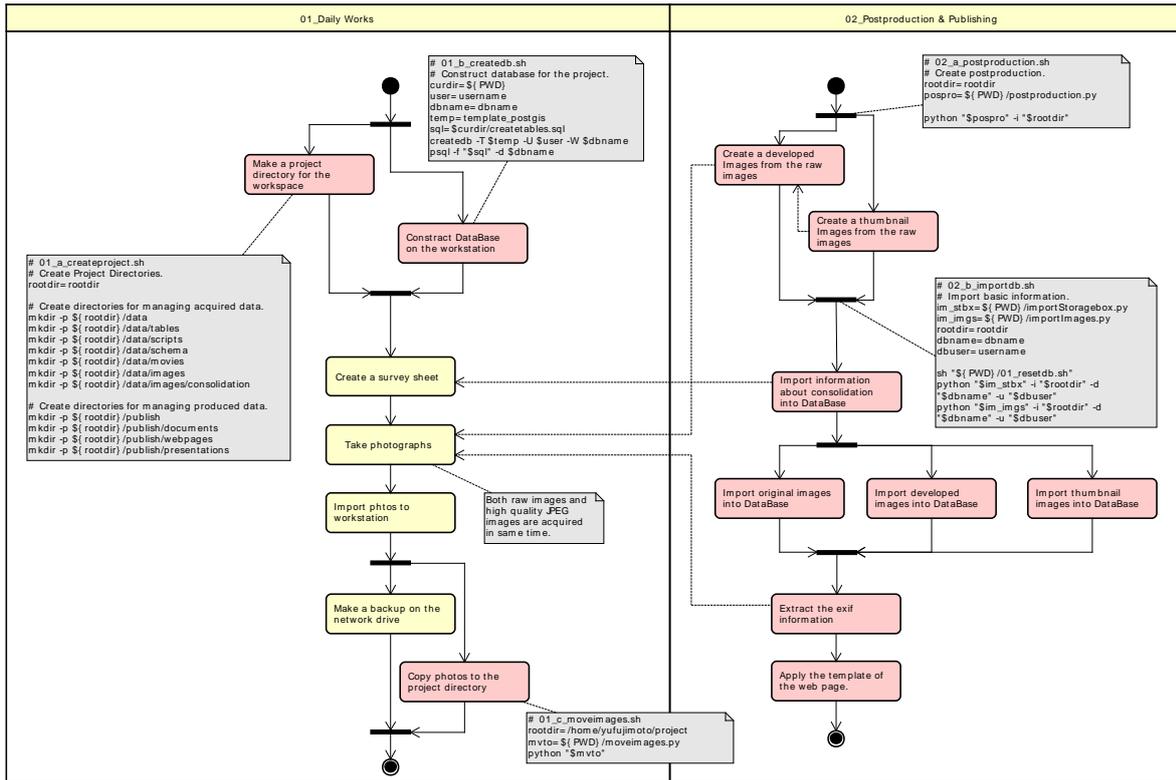


図1: 被災だんじりのデジタル・ワークフロー

デジタル・アーカイブでは、対象となる資料をデジタル化することも重要であるが、デジタル化の作業手順を明確化することは、デジタルデータを長期的に保管し、後世に残す上で重要なテーマとなっている*4。本プロジェクトでは、そうした問題もあって、作業手順を明確化するためにデジタル・ワークフローを検討した。

デジタル・アーカイブを構築するには、単にデジタル・カメラで撮影するだけではなく、様々な事後処理が必要となる。そのため、撮影によって得られたデジタル画像を体系的に整理するとともに、必要な画像処理を行い、さらには、現場での調査票とのマッチングを行うことも必要となる。この一連のプロセスは、マウス操作とエクセルなどの表計算ソフトで行うことも可能ではあるが、複数の組織が関わるプロジェクトや、長期的で作業員の交替があるプロジェクトの場合には、ファイルの置き方や個人々のデータ入力の癖が深刻な問題を引き起こすことがある。また、パソコンの容量が一杯になってファイルを削除したり、パソコンが古くなって買い替えた時などに、ファイルの移動時にデータを消失してしまうなど、不測の事態が発生する可能性もある。表計算ソフトで管理されているデータに関しても複数の関係者が別々に管理していると、時間が経つうちに内容が別々に書き換えられ、最新のデータが判らなくなることも少なくない。こうした問題に事前に対処するためにも、体系的な情報管理と明確なワークフローを整理しておくことが不可欠である。

本プロジェクトにおいてもこの問題を考慮し、最初にデジタル・アーカイブのワークフローを整理した*5。図1では、中央の分離線に対して左側のレーンに現場での撮影作業の

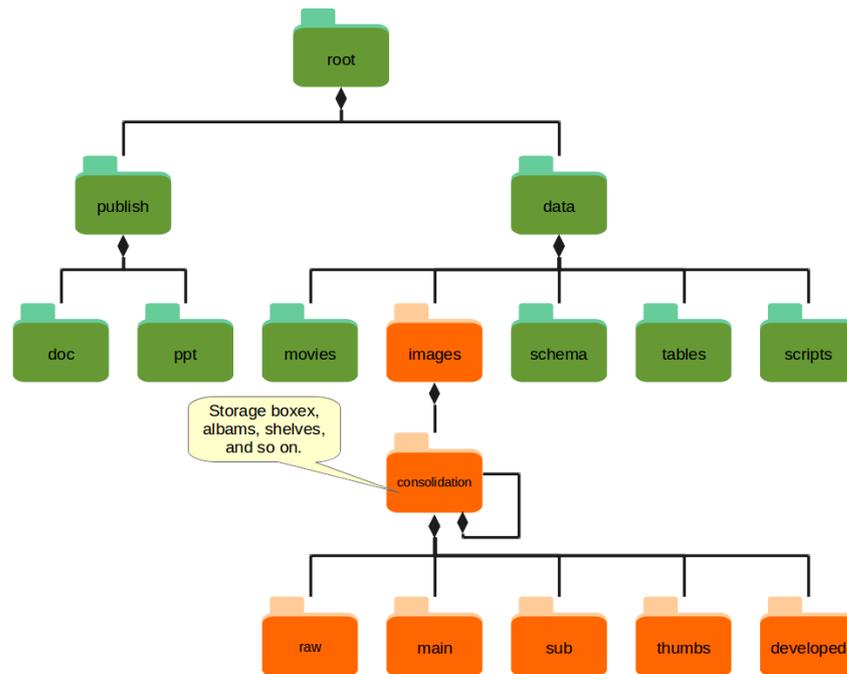


図2:成果物を格納するためのフォルダの構造

ワークフローを記述し、右側には撮影後の事後処理のワークフローを記述している。このような図を事前に準備することで、プロジェクトの作業の全体を設計し、現場での作業を行う段階においても、全体の流れを意識しながら作業できる。

このワークフローでは非常に細かい部分まで自動化をするように設計している。例えば、撮影段階のワークフローではファイルの移動に関しても自動化している。マウス操作でひとつずつ移動することも可能であるが、今回のプロジェクトでは、全く同じデジタル・カメラを二台使用し、両方とも撮影開始前にファイル名のナンバリングをリセットしていたため、そのまま移動すると重複するファイル名で上書きを行ってしまう可能性があった。そこで、ファイルを移動する際に撮影に使用したデジタル・カメラのシリアル番号(製造番号)を使用し、ファイル名から撮影に使用したカメラが判るようにしている。

こうしたワークフローを詳細に検討することに加えて、ファイルの移動先についても体系的に管理できるように設計した。図2は、ワークフローを実行するために設計したフォルダ構造である。このフォルダ構造は、デジタル・アーカイブを構築するために得られたデータだけではなく、このプロジェクトを通して作成されたレポートや文書、学会や研究会の発表で使用したプレゼンテーションのファイル、作業風景を収めた動画など、プロジェクトに関連するあらゆるデータを管理できるように設計されている。この図のうち、オレンジ色の部分がデジタル・アーカイブで得られた画像を格納するためのフォルダになる。この部分の最上位の部分が「images」であり、その配下に「consolidation(統合体)」というフォルダがあり、今回のプロジェクトでは、一台の「だんじり」という単位がこれに該当する。さらに、その中には、「appearance(外観)」、「main(メイン)」、「sub(サブ)」、「thumbs(サムネイル)」、「developed(現像)」というフォルダがある。本プロジェクトで

は、一つの資料に対して複数枚の写真が存在していたので、状態の良い方を「main」に移動し、それ以外のデータを「sub」に配置した。また、データの移動の際には、自動的に元画像のサムネイルを生成し、そのデータに関しては「thumbs」フォルダに配置した。

「developed」のフォルダは、RAW データから現像したデータを配置するためのもので、16bit の TIFF 形式のデータを配置するためのフォルダである。

撮影後の事後処理の段階では、すべての基本工程が自動処理で行われ、この段階では RAW データの現像、画像のデータベース構築、Web ページ形式のデータ閲覧システムの構築が行われる。この段階では、EXIF と呼ばれるデジタル画像のメタデータの自動抽出や、資料の調査票とのマッチングも自動的に行われる。本プロジェクトでは、一つの試みとして、資料撮影の際に資料番号を二次元バーコード (QR コード) に変換したものを設置していて、その QR コードの内容を使って表計算ソフト上で作成されていた資料調査票の関連付けを行った。

4. データベースの構築について

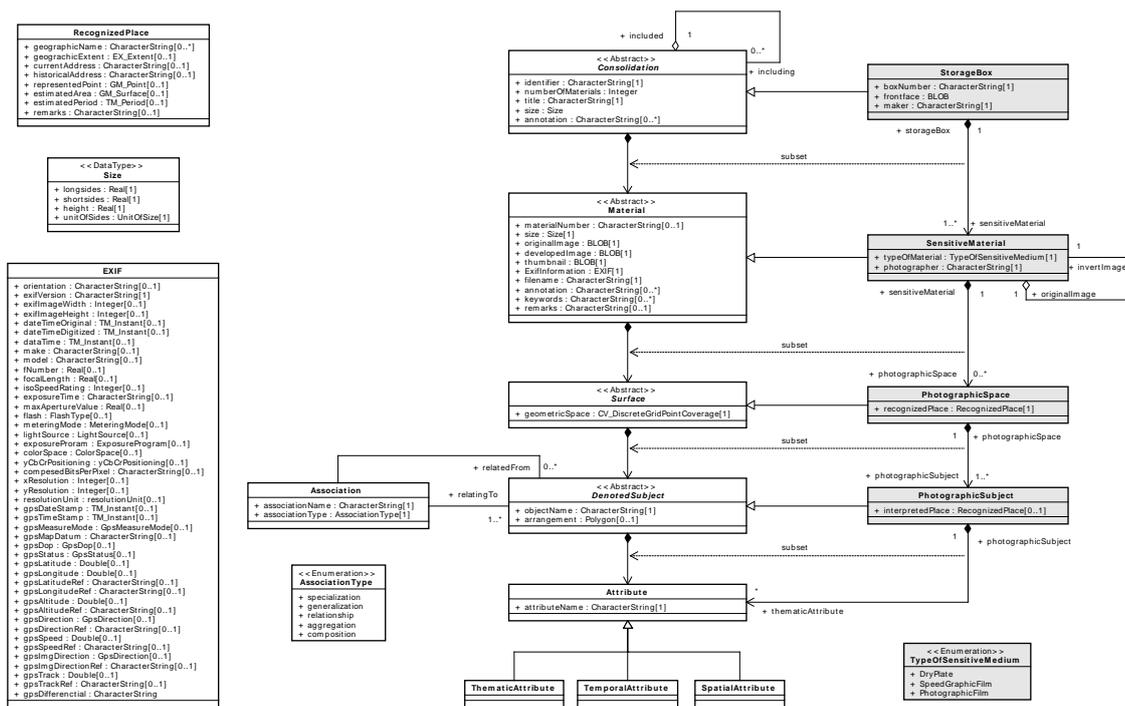


図3: 被災だんじりのための応用スキーマ

本プロジェクトを通して得られたデータは、自動処理によってデータベース上で一元的に管理されると同時に、Web 形式のデータ閲覧システムを通して資料を閲覧できるようになっている。そうした技術は決して特殊なものとは言えないが、本プロジェクトを通して構築されたデータベースは ISO19100 シリーズと呼ばれる国際標準に準拠している点で特色があるといえる*。

そもそも、この国際標準は、国土に関する情報など、主に国や自治体が整備する情報に

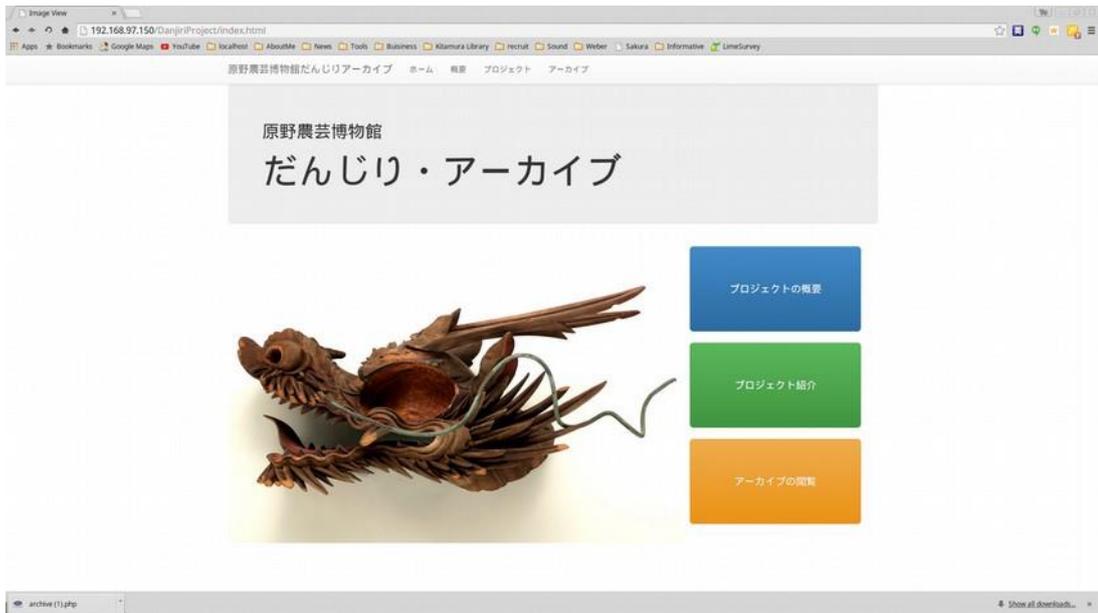


写真3:構築した閲覧システムのホーム画面

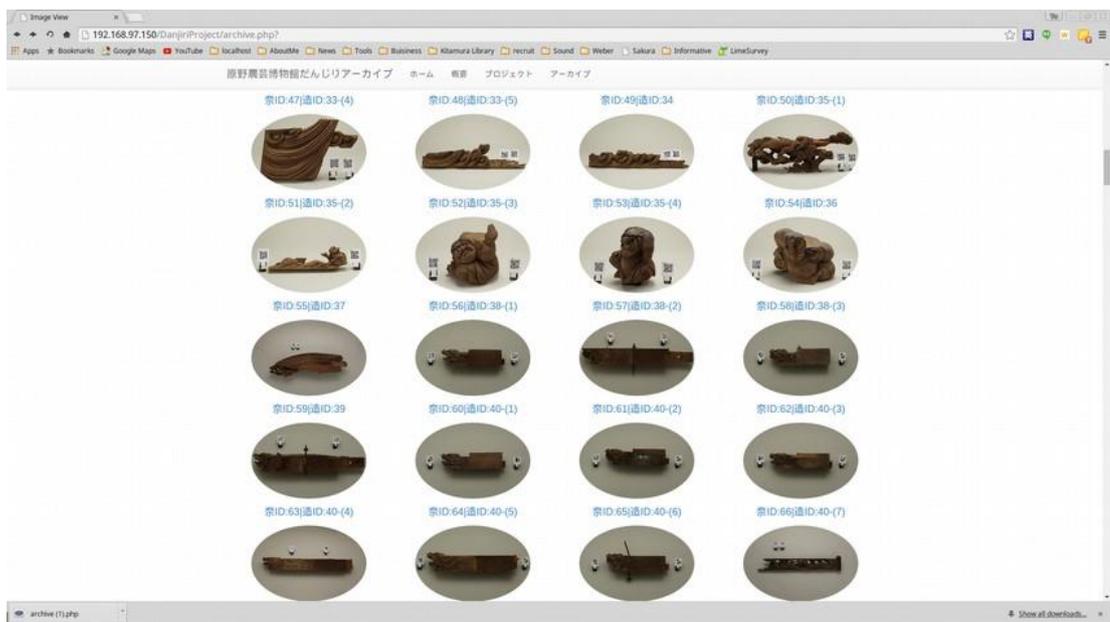


写真4:画像による資料選択画面

適用することが目的とされているが、汎用性が高く、様々な対象に対しても応用的に適用することができる。また、国際標準に準拠してデータベースを設計することで、プロジェクトの汎用性と信頼性、共有性を大きく高めることができ、長期的な情報の管理と運用が可能となる。

図3は、今回のプロジェクトで実際に用いた設計図で、デジタル・アーカイブを管理するためのデータベースはこの設計図にしたがって構築されている。この設計図は、基本的には階層的な構造を持っていて、最上位に「consolidation(統合体)」があり、個別の資料である「material(資料)」を集約する。今回のプロジェクトの場合、一台のだんじりと

いう単位が Consolidation に対応し、個々の部材や破片が「Material」に対応する。さらに、「Material」は、複数の撮影面を持つため「Surface(表面)」の情報を集約し、「Surface」は、その部分的な注記特徴を「Denoted(注記特徴)」を持つことができる。「Denoted」の個々の属性については、対象資料によって与えられる属性が大きく異なるため、柔軟性を持たせるために、属性名は自由に付けることができる。また、属性が時間的なものに関わる場合には、ISO19100 シリーズで定義された「時間スキーマ(ISO19107)」を適用することができ、空間的なものに関わる場合には「空間スキーマ(ISO19108)」を適用できるように設計されている。

実際に構築したデジタル・アーカイブのデータベースは、PostgreSQL というデータベース管理システム(DBMS: DataBase Management System)に構築した⁷⁾。DBMS は、情報を体系的に管理する上で不可欠なシステムであるが、DBMS に格納された情報を見るためには、専用のユーザーインターフェースが必要となる。そこで、本プロジェクトでは、設計した応用スキーマ通りに管理されている情報を Web ブラウザ上で見るための閲覧システムも開発した。このシステムは、PHP という技術で作られていて、必要に応じて情報を呼び出し、デジタル化した画像や、調査票の情報を表示できるようになっている。現段階では、一部の関係者しかアクセスできない状態であるが、基本的にはインターネット上のホームページと同様の仕組みであるため、将来的にホームページ上で閲覧することも可能である(写真3、写真4)。

5. おわりに

今回のプロジェクトでは、原野農芸博物館所蔵のだんじりのデジタル・アーカイブを構築し、その構築プロセスの明確化と国際標準に準拠した情報管理の体系の構築を試みた。特に重要なポイントはとして、特殊な機材は極力使用せず、量販店や通販、あるいは現地でも入手が可能なもので作業環境を整えたことである。これまでのデジタル・アーカイブでは、「高価な資料」を「高価な方法」で構築することが注目されてきたが、災害で被災した資料や過疎化によって廃村の危機にある集落の文化情報を残すためには、機動性が高く、低コストで、最大限の成果を引き出せるような方法が必要とされてる。今回のプロジェクトを通して試みた方法は、習得に何年も要するような特殊技術を必要としない方法でもある。

本プロジェクトでのもうひとつの成果は、迅速な情報構築に成功した点である。作業工程をフロー図で描き出し、各段階での自動化の可能性を検討したことによって、取り込んだ画像から半自動的に閲覧システムに反映するための仕組みの開発に成功し、この閲覧システムにデジタル化した画像を反映させるために要したのは2日程度であった。現地でのスタジオ設営から撮影作業、情報公開までの期間をトータルすると僅か7日間で完了したことになる。対象資料の数が増えた場合には、より多くの時間を要することになるが、おおよその目安として、専門家に頼らず、複雑な形態の文化財を1日に100点程度デジタル

化できることがわかった。

こうした成果の一方で、課題も残っている。今回の作業では、特殊な機材を用いず、可能なかぎり現地調達が可能で可能なものでまかなったが、最低限の準備や現場での作業のマニュアル化は十分にできていない。特に、カメラの設定や撮影時のライティングに関しては、未経験の人には困難がともなうが、そういった作業でさえも可能な限り体系的に整理すると同時に、その方法を可能な限り多くの人々と共有する必要がある。また、開発したシステムについても、認証システムや、情報を追加で書き込むといった機能を有していないため、今後は、半自動的に構築したデジタルアーカイブを利活用するための方法を検討する必要がある。特に、複数のプロジェクトメンバーが安全に情報を共有するための仕組みや、インターネットが繋がらない場所での作業をサポートするためのシステムの開発等も重要な課題である。

現在では、文化財に関わる仕事や、デジタル・アーカイブに関わる仕事は専門家の仕事であるという認識があるが、本来であれば、残すべき文化を受け継いでいる人々が自らの手で残すことが理想的である。そのように考えると、今後の課題としては、今回のプロジェクトで明らかとなった課題を克服するだけでなく、一般の方々との交流を深め、様々な技術を広めていくことが重要であろう。

-
- * 1 立体物を立体のままにデジタル化するための3次元レーザー・スキャナや書類のデジタル化に特化したドキュメント・スキャナ、高解像度の大幅スキャナなど、対象物の特徴に合わせて最適な機材を選択することが理想的である。
 - * 2 従来は、カラーチャートと呼ばれる色見本を置いて撮影するが、デジタル・カメラで撮影したデジタル画像では、グレーカードを用いる。
 - * 3 フラッシュを用いて光量を得る方法は静止画に特化した方法であり、動画やその他のデジタル・アーカイブでは同様の方法は使えない。定常光を上手く利用することで、デジタル・アーカイブを構築する際に利用する機器を選ばず、幅広い手法を選択することができる。
 - * 4 この問題は、デジタルデータの「長期保存問題 (LongTermPreservationIssues)」として、国際的にも大きな課題となっている。理想的には、オープンなメタデータとデータフォーマット、標準化された仕様、実際の処理を記述したプログラムを一つのセットとして保管することが望ましい。
 - * 5 この図は、統一モデル化言語(UML:UnifiedModelingLanguage)と呼ばれる国際標準で決められた記法を使って描かれた図の一つで、一連の作業工程を整理するために使用される。UML アクティビティ図において、矩形で囲まれた部分のことを「アクティビティ」とよび、実際に行うべき作業内容を示し、同時並行での作業の分岐と合流を表す黒色のバーを「フォーク」と「ジョイン」とよぶ。本プロジェクトで作成したアクティビティ図には、本来の記法に加えて、自動処理が可能なアクティビティについては赤色で表現し、写真を撮影したり、カメラのSDカードをパソコンに挿入するといった手作業については黄色で表現している。また、自動処理が可能なものについては、灰色の矩形部分に自動化するためのプログラムの一部を書き、実際の処理がどのように行われるかを表している。
 - * 6 同標準は、現実世界の諸事象を人の認識にしたがってデータベースを設計する方法を規定し、その方法にしたがって設計されたデータベースの設計図のことを「応用スキーマ」とよぶ。今回のプロジェクトでは、この標準にしたがって、だんじりのアーカイブを管理するための応用スキーマを設計した。
 - * 7 PostgreSQLは、無償のデータベース管理システム(DBMS:DataBaseManagementSystem)であるが、非常に高い機能を有していて、デジタル化した画像データに関してもBLOBという形式でデータベース内に格納することができる。また、PostGISという、PostgreSQLのためのプラグインを導入することで、空間データを扱うこともできるようになるため、ISO19100シリーズと非常に相性の良いDBMSと言える。

3D計測によるだんじり彫刻の比較調査

正司哲朗、Nyam Munkhbat

1. はじめに

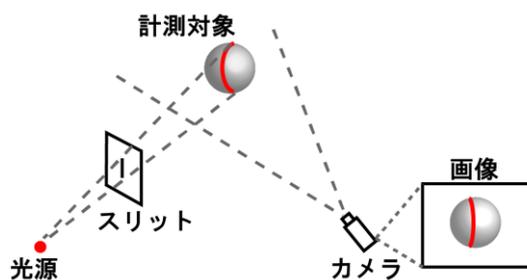
本報告の目的は、小松源助作と言われている原野農芸博物館、中之町地車保存会、雁屋地車保存会所蔵のだんじり彫刻を3D計測し、それらの形状を比較することで、どのような違いがあるかを客観的に捉えることである。ただし、今年度は、3点の彫刻の一部のみを計測しており、検証するためには彫刻のサンプル数が少ないため、小松源助作のものかは言及せず、3D計測したデータからどのような特徴が客観的に抽出できるかを検証することにする。

また、だんじり彫刻をデジタル化し、詳細な構造情報を保存しておくことも、目的の1つである。このような詳細な構造情報は、破損した場合、修復するための基礎データとして利用できる。さらに、だんじりは、保存会によって厳重に管理されており、普段は公開されていないため、デジタル化することでいつでも見ることができる。今回は、デジタル化しただんじり彫刻の一部を、大東市資料館でデジタル展示を行った。また、中之町地車保存会、雁屋地車保存会所蔵のだんじり彫刻の一部を3Dプリンタで印刷することで、研究成果の一部を地車保存会に還元することが可能である。

2. 3D計測技術

(1) パターン光投影法を用いた3Dレーザ計測

本調査では、図1(a)に示すようなパターン光投影法を用いた3Dスキャナー装置を利用した。今回利用した装置では、光源からスリッド光を対象に照射し、それをカメラで撮影し、三角測量の原理で計測を行うものであり、彫刻などの対象には適している。使用した3Dスキャナー装置は、図1(b)に示すNEXTENGINE社の3DスキャナーHD Proであり、約12cmから80cmの範囲を計測することができ、計測精度は0.38mm程度であるが、計測には時間がかかる。

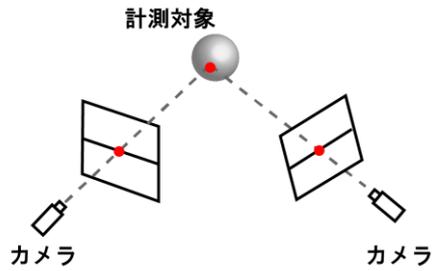


(a) パターン光投影法

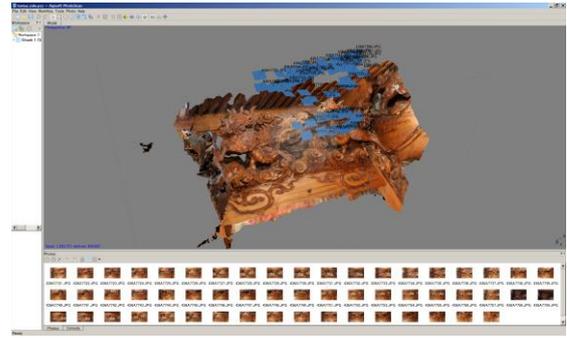


(b) 3DスキャナーHD Pro

図1 パターン光投影法による3Dレーザ計測



(a)ステレオ法



(b) Agisoft社 Photoscan

図 2 ステレオ法による画像計測

(2)画像計測

3D レーザ計測を利用すれば、精度が高い計測が可能であるが、計測に時間がかかるという問題がある。そこで、3D レーザ計測に比べて、精度は低いものの簡易に計測ができる画像計測も併用して行った。画像計測は、図 2(a)に示すように、一般的に、2組の画像（ステレオ画像）を撮影し、各画像から特徴点を抽出する。それぞれ抽出された特徴点から対応している点同士を見つけ、カメラ間の位置と求めた画像中の対応点をもとに、三角測量の原理で計測する方法である。画像中から特徴点を抽出しづらい対象や、対応点が見つからない場合には、計測することができない。画像計測に適した対象は、対象表面に特徴があるものである。だんじり彫刻は、複雑な形状をしており、特徴が多くあるため、画像計測には適した対象である。また、対応点を計算するには、撮影解像度にも依存するが、後処理において、非常に多くの時間がかかる。さらに、カメラ間が相対的な位置でしか分からない場合には、スケールが未知であるため、あらかじめ標定点を入れるか、対象の大きさが既知である必要がある。本調査においては、図 2(b)に示すような Agisoft 社の Photoscan を利用して、画像計測を行った。

3. 3D計測によるだんじり彫刻の比較

(1)3Dレーザ計測と画像計測の精度比較

原野農芸博物館所蔵の麒麟に対して、3D レーザ計測と画像計測の両方を用いて、精度比較を行った結果を図 3 に示す。図 3(a)は、3D レーザ計測を行ったものであり、図 3(b)は、画像計測を行ったものである。両者を見比べてみると、全体の形状は計測できているが、3D レーザ計測を行った図 3(a)に比べて、画像計測を行った図 3(b)は、物体表面の詳細な彫刻の形状が得られていないことがわかる。ここでは、だんじり彫刻を比較するためには、画像計測では精度が低いため、3D レーザ計測で得られたデータをもとに比較する。

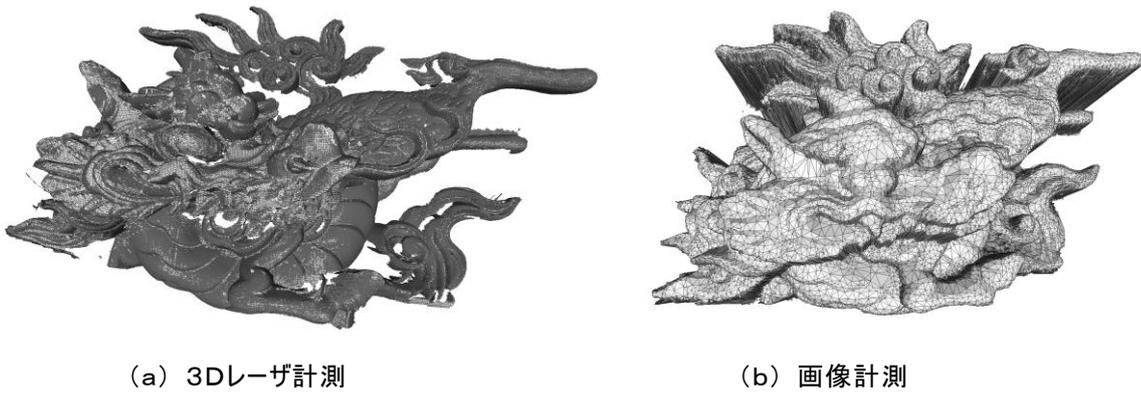
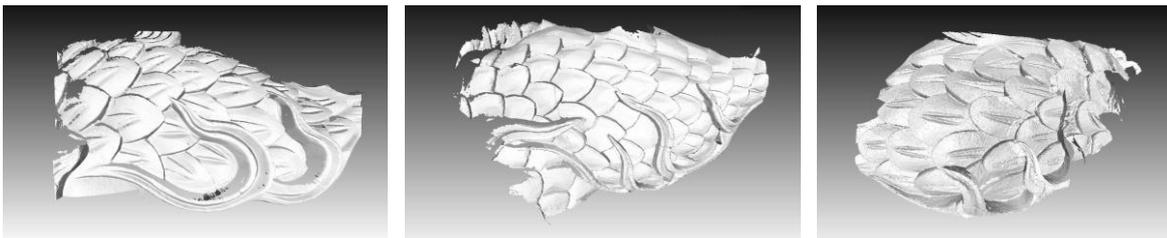


図3 原野農芸博物館所蔵の麒麟



(a) 原野農芸博物館所蔵 (b) 中之町地車保存会所蔵 (c) 雁屋地車保存会所蔵

図4 麒麟の鱗

(2) 比較対象

小松源助作と言われている原野農芸博物館所蔵、中之町地車保存会所蔵、雁屋地車保存会所蔵のだんじり彫刻のうち、同じような構図で描かれた麒麟を対象にする。ただし、画像計測を用いる方法は短時間で撮影可能であるが、先に述べたように、精度が低い。また、3D スキャナー装置を用いる方法は、計測に時間がかかるが精度が高い。今回の比較データは、3D レーザ計測をしたものを利用するが、時間をかけて麒麟全体を計測することは、地車の管理上の問題から難しいため、図4に示すように、麒麟の鱗部分を中心に計測を行った。主観的に形状を比較すると、鱗の形状は、原野農芸博物館と中之町ものは類似しているが、鱗の彫りの部分に関しては、原野農芸博物館と雁屋のものが類似していることがわかる。

(3) 特徴量の抽出と比較

上記でデジタル化しただんじり彫刻から、客観的な特徴を得るためには、3D レーザ計測で得られた点群データから特徴量を抽出する必要がある。点群データから得られる特徴量には、大まかに分けて、キーポイント（注目点）ベースと非キーポイントベースの2種類がある。キーポイントベースの特徴量記述では、Point Feature Histogram (PFH)^{*1}、Fast PFH (FPPH)^{*2}、Signature of Histograms Orientations (SHOT)^{*3}、Normal Aligned Radial Feature (NARF)^{*4} などがある。非キーポイントベースの特徴量記述では、Global Radius-based Surface Descriptor (GRSD)^{*5}、Viewpoint Feature Histogram (VFH)^{*6} などがある。

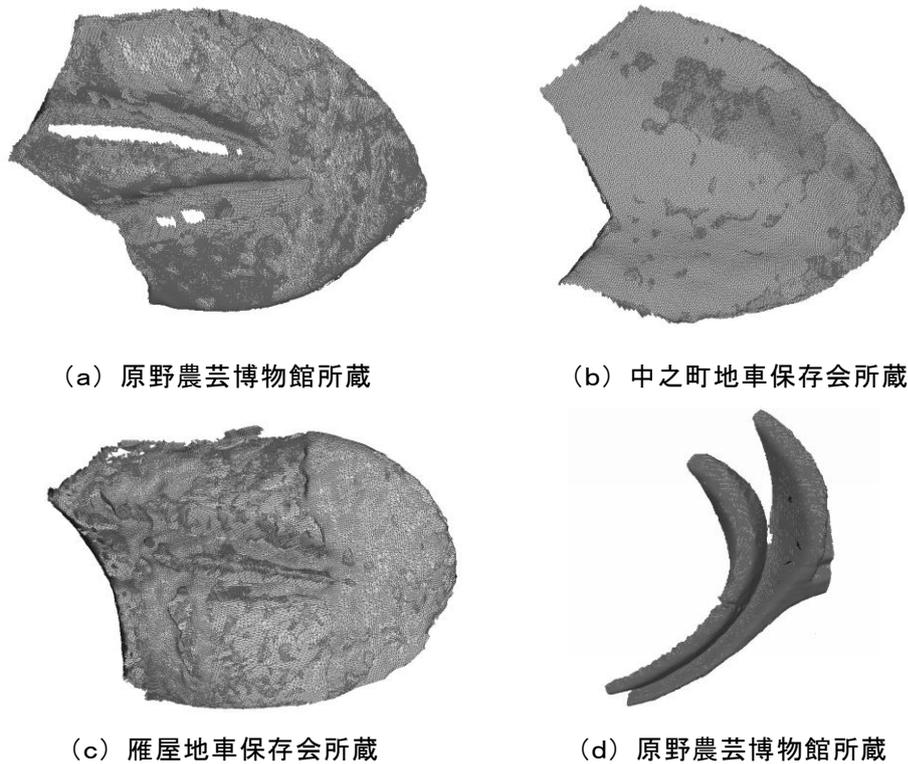


図5 だんじり彫刻の比較対象

キーポイントベースは、主に、複数箇所から計測した点群データをレジストレーション（位置合わせ）するとき利用される特徴量であり、非キーポイントベースは、形状全体の特徴を記述する際に用いられることが多い。ここでは、既にレジストレーションされている形状から、それぞれ特徴量を抽出し、比較することを目的としているため、非キーポイントベースの特徴量を利用する。

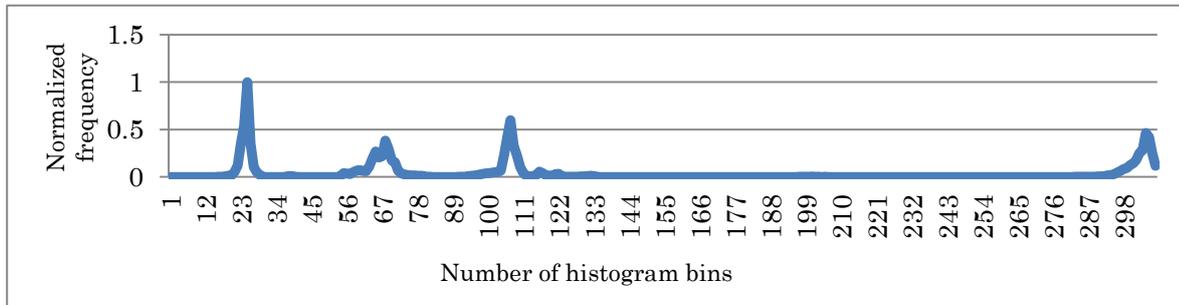
非キーポイントベースの特徴量のうち、GRSD は、すべての面が平面、円柱、エッジ、リム、球の幾何カテゴリにラベリングされ、全体のクラスタが、これらの幾何カテゴリの中の 1 つに分類されるものである。物体形状の認識などに利用される特徴量であり、プリミティブな形状に対して、識別するには有効な特徴量である。

一方、VFH は、FPFH（キーポイント周辺における法線方向を記述する特徴量アルゴリズムを高速化したもの）をもとに拡張された特徴量であり、物体の姿勢やスケールに不変な特徴量である。VFH は、視線に関する情報と特徴に関する情報の 2 つをもち、特徴に関する情報は、FPFH をキーポイントではなく、全点に対して行っている。

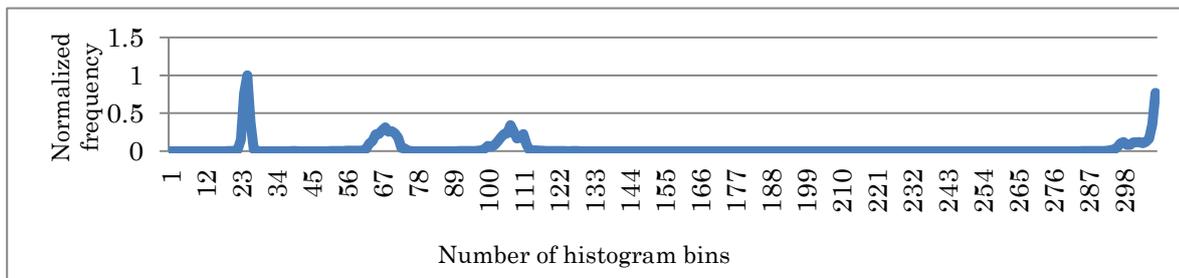
本研究においては、全体形状を記述できる特徴量を利用し、物体表面の形状の違いに着目して比較するため、視点に関する記述と、物体の姿勢・スケールに不変な VFH を用いることにする。

比較対象は、図 4 に示すだんじり彫刻から、図 5(a) から (c) に示すように、計測した麒麟からそれぞれ 1 鱗を抽出したものを利用する。この理由は、それぞれ計測できている範囲が異なり、全体形状が明らかに異なり、そのまま比較することができない

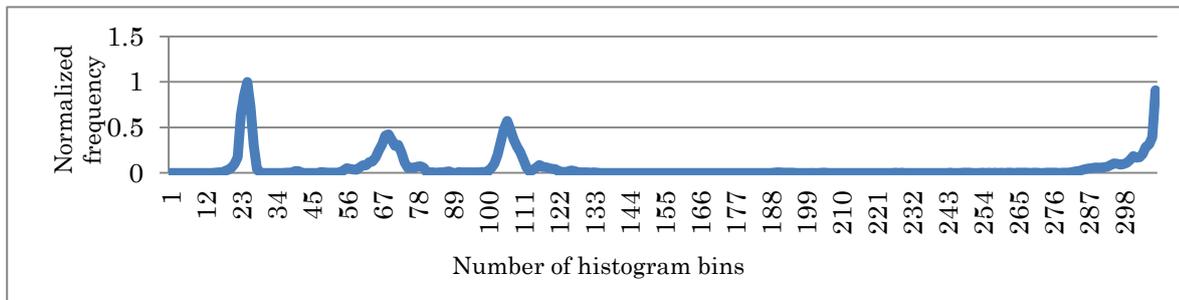
めである。なお、得られた特徴量の比較のために、図5(d)に示すように、鱗以外の部分を抽出したのもも利用する。図5に対して、法線方向の探索範囲を1.0に設定し、VFHを求め、それぞれ頻度を正規化したものを図6に示す。得られたVFHを比較すると、(a)、(b)、(c)ともに類似しており、(d)とは異なることがわかる。すなわち、形状が類似している鱗とそれ以外の特徴がVFHにより捉えられたことを示している。



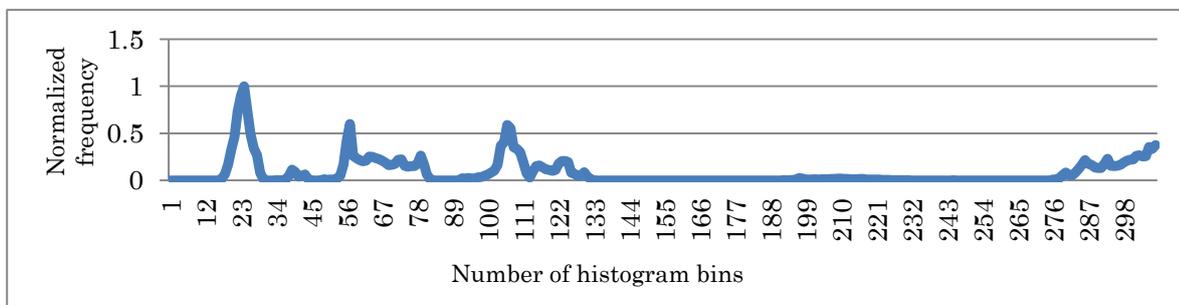
(a) 原野農芸博物館所蔵(鱗)



(b) 中之町地車保存会所蔵(鱗)



(c) 雁屋地車保存会所蔵(鱗)



(d) 原野農芸博物館所蔵(鱗以外)

図6 VFHの結果

表 1 RMSEによる評価

	(a)	(b)	(c)	(d)
(a)	-	0.0579	0.0711	0.1046
(b)	0.0579	-	0.0588	0.1162
(c)	0.0716	0.0588	-	0.0901
(d)	0.1046	0.1162	0.0901	-

次に、各 VFH がどれくらい類似しているかを RMSE (Root Mean Squared Error) によって評価する。図 6 に示した VFH の中から、2 つの間で RMSE を求めた結果を表 1 に示す。なお、表中の (a) は原野農芸博物館所蔵の鱗一片、(b) は中之町地車保存会所蔵の鱗一片、(c) は雁屋地車保存会所蔵の鱗一片、(d) は原野農芸博物館所蔵の鱗以外である。表 1 においては、0 に近いほど形状が類似していることを示しており、表では、(b) の中之町地車保存会の鱗一片が、(a) と (b) に最も類似していることがわかった。

上記の結果は、形状の類似性について VFH を用いて評価を行ったものである。しかしながら、今回の評価実験では、サンプル数が少ないため、小松源助作の彫刻の特徴を客観的に表すことができない。小松源助作の彫刻の特徴を捉えるためには、小松源助作とされる彫刻と、そうでないものから、それぞれの形状が類似している部位を抽出し、様々な特徴量を求め、それらを基に分類していくことで、小松源助作の彫刻の特徴が見えてくるため、より多くのだんじり彫刻を対象に特徴量を抽出していく必要がある。

4. だんじりデジタルアーカイブ展示と3Dプリンタの利用

(1) 原野農芸博物館所蔵だんじり彫刻のデジタル展示

大東市歴史民俗資料館において、2015年9月26日から11月29日まで公開の企画展「だんじりの記録、だんじりの記憶」に合わせて、原野農芸博物館所蔵のだんじり彫刻3点（獅子、獅嚙、麒麟）を、図7(a)に示すように画像計測によりデジタル化し、利用者が自由に視点を変えて閲覧できるようにした。なお、デジタルデータの表示には、WebGLを利用した。WebGLは、HTML5で策定されたcanvasタグを用いて3DCGを描画するため、一般的なブラウザでも特別なプラグインを必要とせず表示することが可能である。また、Webサーバにデジタルコンテンツを置くことで、スマートフォンでも対応するブラウザであれば閲覧することができるため、今後、利用用途が広がっていく可能性のある技術である。なお、画像計測を行うにあたり、図7(b)の獅子は112枚、図7(c)の獅嚙は125枚、図7(d)の麒麟は94枚撮影し、先に述べたAgisoft社のPhotoscanを利用して画像計測し、デジタル化を行った。

画面をクリックして下さい。

原野農芸博物館所蔵だんじり彫物デジタルアーカイブ

獅子	獅嚙	麒麟
		

Copyright (c) 2015
だんじりを活かした地域共創事業実行委員会／奈良大学
All Rights Reserved.

(a) 展示画面のトップ



(b) 獅子の3Dデジタル化



(c) 獅嚙の3Dデジタル化



(d) 麒麟の3Dデジタル化

図7 原野農芸博物館所蔵のだんじり彫刻

(2) 中之町・雁屋所蔵だんじり彫刻の3Dプリンタ印刷

中之町地車保存会所蔵、雁屋地車保存会所蔵のだんじり彫刻を上記と同様に画像計測を行いデジタル化した。デジタル化した彫刻は、だんじりの正面と右側面の彫刻である。中之町のだんじり彫刻は、正面を108枚、右側面を126枚撮影し、雁屋のだんじり彫刻は正面を62枚、右側面を55枚撮影した画像から画像計測を行い、図8、図9に示すようにだんじり彫刻をデジタル化した。

さらに、デジタル化した彫刻を3Dプリンタで印刷した。3Dプリンタの方式には様々あり、一般的に利用されている方式は2種類である。1つは、熱溶解積層方式であり、熱で溶ける樹脂を利用して、一層ずつ積層していく方式である。利用する樹脂はABSやPLAであり、ABSは加工しやすい反面、柔らかいという特徴がある。PLAは、ABSに比べて堅く、加工しづらい反面、そりが少なく複雑な形状をプリントするときには優れている。もう1つは、紫外線などで硬化する液体樹脂を利用して、一層ずつ積層する方式である。熱溶解積層方式に比べて、比較的精度が高いものが印刷できるが、レーニングコストが高い。ここでは、熱溶解積層方式であるFLASHFORGE社Dreamerを利用して印刷を行った。この3Dプリンタで出力できる最大サイズは、225mm×145mm×140mmであり、積層ピッチは0.05mmに設定した。印刷には1つあたり24時間以上を要した。図10に3Dプリンタで印刷しただんじり彫刻を示す。印刷した彫刻のスケールは、実際の約1/20である。大まかな形状は印刷できているが、画像計測によって得られたデジタルデータを用いているため、細部までは再現できていないことがわかる。



(a) 正面の彫刻

(b) 右側面の彫刻

図8 中之町地車保存会所蔵のだんじり彫刻



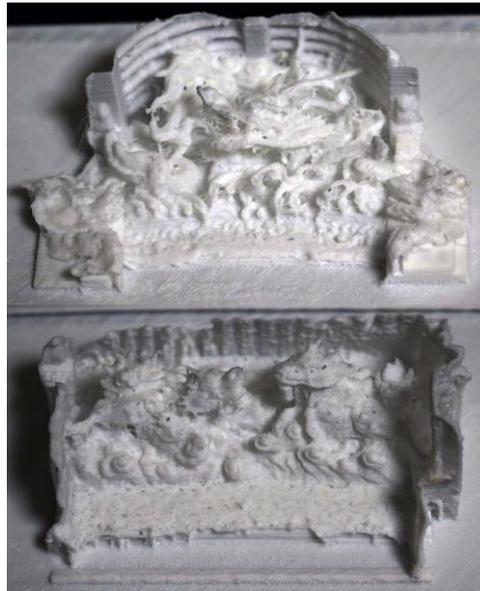
(a) 正面の彫刻

(b) 右側面の彫刻

図9 雁屋地車保存会所蔵のだんじり彫刻



(a) 中之町のだんじり彫刻



(b) 雁屋のだんじり彫刻

図10 3Dプリンタの印刷結果

5. まとめ

本報告では、画像計測および3Dスキャナー装置を利用して、小松源助作と言われる原野農芸博物館、中之町地車保存会、雁屋地車保存会所蔵のだんじり彫刻の一部を計測した。そのうち、3Dレーザ計測した麒麟の鱗の一部において、形状がどのように異なるのかを、Viewpoint Feature Histogram(VFH)の特徴量を用いて比較した。その結果、中之町地車保存会所蔵の鱗一片が、原野農芸博物館所蔵のもの、雁屋地車保存会所蔵のものに、最も類似していることが客観的に示された。しかしながら、この結果によって、小松源助の特徴が記述できた訳ではない。だんじり彫刻を制作するにあたり、多くの彫り師が携わっていることが推察されるため、例え、小松源助作であったとしても、すべてに同じ特徴があるとは限らない。本研究の最終目的は、小松源助作の彫刻にどのような傾向があるかを客観的に捉えることである。この目的を実現するためには、小松源助以外の彫刻に対しても特徴を抽出し、分類していく必要がある。さらに、資料や銘文をもとに、小松源助作と確実に特定できる彫刻を見つける必要がある。

また、本報告では、原野農芸博物館所蔵のだんじり彫刻の一部を画像計測し、大東市資料館で展示できるように、デジタルコンテンツの作成方法について述べた。さらに、中之町地車保存会、雁屋地車保存会所蔵のものに関しては、3Dプリンタを用いて印刷し、印刷したものをそれぞれの保存会に提供することで、研究成果の一部を一般市民に還元することができた。画像計測は、3Dスキャナー装置に比べて、精度は低いと比較的データ量が少ないため、デジタル展示や3Dプリンタで出力して利用するのに適している。

しかしながら、だんじり彫刻の計測方法については検討する必要も生じた。画像計

測は短時間で撮影することができるが、3D レーザ計測よりも精度が低いため、彫刻の特徴量を抽出するには不向きである。3D レーザ計測は精度が高いが、今回利用した 3D スキャナー装置では時間がかかるという問題点がある。だんじりの管理上、多くの時間をかけて計測することが難しいという現状があり、短時間で精度良く計測できる方法を考える必要がある。

【参考文献】

- *1 R. B. Rusu, N. Blodow, Z. C. Marton, M. Beetz, "Aligning Point Cloud Views using Persistent Feature Histograms," *In Proceedings of the 21st IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS)*, pp.22-26, (2008).
- *2 R. B. Rusu, N. Blodow, M. Beetz, "Fast Point Feature Histograms (FPFH) for 3D registration," *The IEEE International Conference on Robotics and Automation, 2009. (ICRA '09)*, pp. 3212-3217, (2009).
- *3 F. Tombari, S. Salti, L. Di Stefano, "Unique Signatures of Histograms for Local Surface Description," *In Proceedings of the 11th European Conference on Computer Vision*, pp 356-369, (2010).
- *4 S. Bastian, R. Radu, Bogdan, K. Kurt, B. Wolfram, "NARF: 3D Range Image Features for Object Recognition," *Workshop on Defining and Solving Realistic Perception Problems in Personal Robotics at the IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS)*, (2010).
- *5 Z. Csaba Marton, D. Pangercic, N. Blodow, M. Beetz, "Combined 2D-3D categorization and classification for multimodal perception systems," *In the International Journal of Robotics Research*, Vol. 30 No. 11, pp. 1378-1402, (2011).
- *6 R. B. Rusu, G. Bradski, R. Thibaux, J. Hsu, "Fast3DRecognition and Pose Using the Viewpoint Feature Histogram," *In Proceedings of the 23rd IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS)*, pp. 2155-2162, (2010).

あたり、この年に新調されたことがわかる。(写真1)

(3)棟札

棟札は、建築物の棟上げまたは改築の際に工事の由緒・年月・建築者・工匠などを記して棟木に取り付ける札を指す。現在でも寺社や家屋の新築・改築の際に棟札を取り付けることが多い。



写真1 経寺墨書

この棟札が、だんじりに取り付けられる例が見られる。大東市内のだんじりでは、中之町で確認ができ、「明治十二卯年十月廿七日／一 上棟地車／□□□（細工人カ）／木本与三郎／植村寅吉／河村定五郎」と墨書されている。この棟札より、中之町のだんじりは、明治12年（1879）に木本与三郎・植村寅吉・河村定五郎の3人により製作されたことが判明する。

3. 保存会・地域に伝わる古文書・古記録

これまで提示した文字史料は、直接文字を刻んでいるものや書いているもの、棟札といった、だんじり本体に取り付けられているものを主に取り上げたが、次に各保存会が所有する古文書や古記録、地域に伝わる古文書について紹介する。

(1)保存会に伝わる史料・古記録

今年度まで調査した中で、古文書を所有する保存会は数か所確認できた。その中でも特徴的なものを取り上げる。

まず、中之町には、「地車売渡証書^{*2}」と名付けられた古文書が残っており、書面から大正5年（1916）4月21日付けで「北河内郡住道村字三ヶ江ノ口」（江ノ口南）が「全郡四條村字北條」（中之町）へだんじりと綱や床板・台棒・徳利・擬宝珠・御幣などの付属品、倉1か所を売却したことが記されている。

また、西ノ口には江戸後期頃の「花帳」といった金銭に関わる記録類が多く残されているが、その中でも「地車仕様書^{*3}」と書かれた2冊の冊子が残されている。2冊とも表紙から文政7年（1824）に作成したことがわかるが、1冊は「九月下旬改之」、もう1冊は「十二月上旬」とある。2冊の記述を比較すると寸法などに違いがあることから、元あったものが「九月下旬」に改められ、「十二月上旬」に再び改訂されたと考えられる。これらの冊子には、正面柱間を何尺にするか、高欄の厚さを何尺にするか、各部位の彫物はこういった図柄にするかなど、だんじりの仕様が書かれたものである。仕様書に書かれただんじりは「十二月上旬」の冊子から、「西ノ口若中」より木間村（現、四條畷市）の大工浅右衛門へ注文したことがわかる。

このような西ノ口「地車仕様書」に似た冊子が、四條畷市の雁屋地車保存会にも現

存している。「地車請負定約書^{*4}」と名付けられた冊子は、小松源助が雁屋のだんじりの彫物を請け負った時の契約書である。内容としては、各部位の彫物がいくつ必要か列記されたあと、「同郡北条村北野町地車彫物二寸分相違／無之様仕上ケ可申候若手抜等有之候得者／御指図之通何度ニ而茂御取替可致候間／来ル明治十六年未三月卅日限り急度相渡／可申候間右代金之儀者地車組上ケ彫物／相違等御座候節者残金請取不申／約定書依而如件」とあり、北条・北之町のだんじりに施された彫物と寸分違わないように仕上げ、もし手抜きがあれば、指示通り何度も手直しすること、明治16年(1883)3月30日までに受け渡すこと、代金についてはだんじりを組み上げたあとに注文と違いがあれば残金は受け取らない旨が書かれている。これに関連した史料として、小松が雁屋の人から手付金を受け取った領収書が現存している^{*5}。これら2点の史料は小松直筆の史料で、今後小松研究を行う上でとても重要である。

今まで触れてきた上記3か所の史料のように、仕様や大工・彫師といっただんじり自体に関わる史料を取り上げてきたが、一方のだんじりを護持する人々についての史料はどういったものが現存しているのだろうか。江ノ口北に「万年帳^{*6}」という記録が伝わっている。第2部でも触れるが、この史料は江戸時代から受け継がれており、帳面を受け継ぐ人を「帳元」と呼び、歴代の帳元は「万年帳」に記録された。この中には、文政10年(1827)に「檀ぢり蔵奉賀」と題された頁があり、「檀ぢり蔵」のために41名が金銭を出し合ったことがわかる。この前後には「檀尻蔵」を直した、「檀尻元蔵」を譲渡したなどの記述が見えることから、文政10年以前から地車庫を所有していたことがうかがえ、だんじりを取り巻く人々の活動を垣間見ることが出来る。

(2) 地域に伝わる古文書

これまで、保存会が所有する古文書や記録を紹介してきたが、次に庄屋家が所蔵する古文書群の中にだんじりに関する古文書が残されており、行政からの視点でだんじりがどういう捉え方をされていたのかを見ていく。

新田村(現、大東市新田本町及び新田東本町)の庄屋を代々務めた岡本家に伝わる古文書群の中に、だんじりに関連する古文書が2点残されている。まず1点は、だんじりの組み立てについては両村で話し合いを行い、だんじり・太鼓の宮入り、俄芝居は東が先に行なう事、翌日の俄芝居は西が先に行ない、宮出も西から先に行なう旨を取り決めた古文書が残されている^{*7}(写真2)。江戸後期、新田村は東西に分かれており^{*8}、各村でだんじりを所有していた。この文書から祭礼日には宮入などの順番を巡り、双

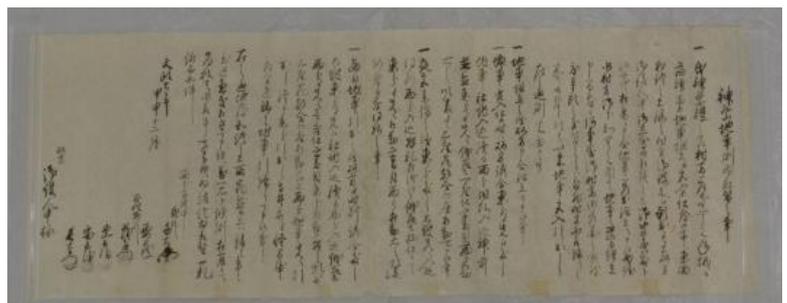


写真2 「文政七年祭礼地車曳取替書」

方で争いになっていたことがわかる。

2つ目は、役所の求めに応じて、村内で具体的な儉約事項を取り決めた古文書で、その中に「村方神事之儀、祭礼者前々仕来之通相勤、其外御みこし又者地車等出シ候義者、畢竟自分慰にて奢之沙汰故有間敷候儀ニ候間、向後決而無用に可致候^{*9}」という条文がある。これは、神事は従来通り行ってもよいが、「御みこし」や「地車」などは「自分慰」であり、「奢之沙汰」なので行わないようにと決められている。別の同様の史料でもこういった記載があることから、だんじりは華美であったため、儉約の対象であったと考えられる。

4. おわりに

これまで、銘・墨書・棟札・古文書・古記録といった文字史料を取り上げて、どのような内容が書かれているかを紹介してきた。これらの史料を検討し、学術的な研究として大東のだんじりを取り上げるには、まだまだ史料数が不十分だと言える。だんじり本体や、彫物を手掛けた人物を特定するには特徴だけでなく、雁屋のように銘の他に保存会が所有する古文書からも小松源助の作品と考えられるように、銘や墨書、棟札、古文書等があれば作者の確定ができ、総合的に研究が進むと考える。

そのようなことから、今後も保存会や地元には伝わる文字史料を発見・調査を行えばと思う。

-
- *1 「在銘だんじりの調査」(だんじりを活かした地域共働事業実行委員会編『だんじりを活かした地域共働事業報告書』第4章第1節、株式会社アステム、2015)で掲載している10台に経寺を加えた。
 - *2 中之町地車保存会蔵
 - *3 西ノ口若中蔵
 - *4 雁屋地車保存会蔵
 - *5 注4
 - *6 江ノ口北若中地車会蔵
 - *7 「文政七年祭礼地車曳取替書」(大東市教育委員会編『大東市史』、1989)
 - *8 「解説」(大東市史編纂史料目録第3集『新田村庄屋文書』、大東市教育委員会、2009)
 - *9 「村方取締并兼約定書」(大東市史編纂史料集6『新田村庄屋文書』二一50、大東市教育委員会、2016)

方で争いになっていたことがわかる。

2つ目は、役所の求めに応じて、村内で具体的な儉約事項を取り決めた古文書で、その中に「村方神事之儀、祭礼者前々仕来之通相勤、其外御みこし又者地車等出シ候義者、畢竟自分慰にて奢之沙汰故有間敷候儀ニ候間、向後決而無用に可致候^{*9}」という条文がある。これは、神事は従来通り行ってもよいが、「御みこし」や「地車」などは「自分慰」であり、「奢之沙汰」なので行わないようにと決められている。別の同様の史料でもこういった記載があることから、だんじりは華美であったため、儉約の対象であったと考えられる。

4. おわりに

これまで、銘・墨書・棟札・古文書・古記録といった文字史料を取り上げて、どのような内容が書かれているかを紹介してきた。これらの史料を検討し、学術的な研究として大東のだんじりを取り上げるには、まだまだ史料数が不十分だと言える。だんじり本体や、彫物を手掛けた人物を特定するには特徴だけでなく、雁屋のように銘の他に保存会が所有する古文書からも小松源助の作品と考えられるように、銘や墨書、棟札、古文書等があれば作者の確定ができ、総合的に研究が進むと考える。

そのようなことから、今後も保存会や地元には伝わる文字史料を発見・調査を行えばと思う。

-
- *1 「在銘だんじりの調査」(だんじりを活かした地域共働事業実行委員会編『だんじりを活かした地域共働事業報告書』第4章第1節、株式会社アステム、2015)で掲載している10台に経寺を加えた。
 - *2 中之町地車保存会蔵
 - *3 西ノ口若中蔵
 - *4 雁屋地車保存会蔵
 - *5 注4
 - *6 江ノ口北若中地車会蔵
 - *7 「文政七年祭礼地車曳取替書」(大東市教育委員会編『大東市史』、1989)
 - *8 「解説」(大東市史編纂史料目録第3集『新田村庄屋文書』、大東市教育委員会、2009)
 - *9 「村方取締并兼約定書」(大東市史編纂史料集6『新田村庄屋文書』二一50、大東市教育委員会、2016)

いつごろのこと

昭和・平成 年ごろ
19 年代・20 年代
☆和暦西暦のどちらかに記入
() 才のとき

どこでのこと

だれとのこと

調査者

調査日 年 月 日

調査地区

語り手 () 才

だんじりの思い出 あんな事こんな事
どんな思い出

My Little Museum

第2部 だんじりの記憶



第1章 市民学芸員の調査・展示

佐藤優香・武井二葉

1. 大東市立歴史民俗資料館・市民学芸員とは

(1) 市民学芸員になるまで

市民学芸員とは、大東市立歴史民俗資料館において、より豊かで多彩な博物館活動を行うための専門スタッフです。平成21年度に実施した「市民学芸員講座」を修了した27名が、平成22年に市民学芸員として誕生しました。

平成25年度、「市民学芸員講座」を改め「学芸員体験講座」とし、幅広い層の方に「学芸員」や「博物館」に対する理解を得る講座としてリニューアルしました。座学だけでなく、実物資料に触れながらの実習を年間12回受講していくなかで、「モノ（資料）」に触れたり、「ハコ（博物館）」を使ったりして遊ぶことを体験していきます。その結果、講座の修了生の中から新しい「市民学芸員」が加わり、現在37名が活躍しています。

(2) 市民学芸員になってから

市民学芸員が、博物館の「モノ」や「ハコ」を使って「やりたいこと」「できること」「学びたいこと」「活かしたいこと」はさまざまです。人数が増えると、資料館だけの思いでは市民学芸員の「やりたいこと」や「活かしたいこと」を十分に汲み取れなくなってきました。そこで、平成27年度からは「学芸員提案事業」と「市民学芸員提案事業」の2本の柱から、より「豊かで」「多彩な」博物館活動を実現していくことにしました。

市民学芸員提案事業は、市民学芸員自身が「やってみたいこと」「活かしたいこと」を考え、実現していきます。今年度は、「慈眼寺（野崎観音）」「民俗収蔵庫」「まつりの音・声」をテーマとした事業が誕生し、それぞれのチームで調査をしたり、勉強会をしたりと活動しています。

学芸員提案事業では、学芸員が企画・発案した事業について、市民学芸員の参加を呼びかけるものです。例えば、民俗を担当する学芸員は、収蔵する民俗資料をつかった米づくりの事業。文献資料を担当する学芸員は、ふすまの下貼りとなった古文書をはがす作業と解読のための講義を。教育普及の担当は、学校連携をテーマとして、市民学芸員と一緒に展示やイベントを考え、実施してきました。

今回のだんじりを活かした地域共働事業は、学芸員提案事業として、実行委員会と全学芸員が担当し、市民学芸員とだんじりの調査＋展示を実施することになりました。（武井）

2. 市民学芸員によるだんじりの調査

(1) テーマ：記憶を記録する

だんじり祭りの調査は、前年度から継続されているテーマでした。しかしながら、これまでの取り組みと今年度の取り組みには大きな違いがありました。これまでは、だんじりの彫物に焦点をあてて行われており、モノを通しての調査でした。それに対して今年度は、お囃子やかかけ声、関連する行事、思い出など「人への聞き取り」で情報を得る作業を通して、「目に見え

ないもの」を調べる調査です。すなわち、だんじりにまつわる人々の「記憶」を「記録する」ことを目指しました。

(2)プレワークショップ:ハレの日カレンダーづくりワークショップ「家族の暦」

市内の各所に出向いて聞き取り調査を行う前に、館内でプレワークショップを実施しました。見えないものを調べるための手法をイメージし、市民学芸員ひとり一人が自立した調査者になるための最初の活動です。

プレワークショップでは、参加者の家庭のハレの日について調べることにしました。市民学芸員もだんじりの調査対象地域に暮らしているので、家族の行事を聞き取りしていく中には、だんじり祭りに関わるものも出てくることが予想され、フィールド調査の前段階調査としても有効であるのではないかと考えました。また、正月や節句の行事、家族の誕生日などいずれの家庭においても見いだされるであろう事柄と、ゴールデンウィークや夏休みには恒例の集まりなどその家庭ならではの事柄が考えられました。たとえ、いずれの家庭においてなされるような行事であっても、その内容は家庭ごとに異なり、さまざまであろうことが予測されました。1年間の各家庭のハレの日を調べることから、ワークショップは「家族の暦」と名付けられました。

ここでは、市民学芸員が調査者と被調査者の両方の役割を体験します。調査者は、被調査者の家庭の「人が集まる行事」などについて、なぜ、どのような日に、誰が参加し、どんなことをするのか、何を食べるのか、いつからやっているのか、などを聞き取りします。これらの質問事項はワークシートにあげられており、調査者は相手の話を聞きながらワークシートにメモを取っていくことで、その行事について記録されていく仕組みです。行事や食事などはその場で消えていくもので、聞き取りが何よりの情報源になります。どのようにして聞くと情報が得られるのか、自分が聞き取った情報をどのようにメモすれば他者にとっても意味のある記録となるのか、などを考えながら体験してみることで、実際のフィールド調査における勘所がイメージされていくことでしょう。

また調査する側だけでなく、調査される側の役割を体験することにも意味があります。被調査者は自らの習慣や家庭の文化を他者に語ることとなります。プライバシーに関わることを語るとまどいや、楽しさなど、自らを語ることによってもたらされる感覚を体験しておくことで、調査される側の気持ちを慮りながら調査するという姿勢を学ぶことができるでしょう。

(3)ワークシート:調査を記録するツール

プレワークショップにおいても、フィールドでの聞き取りにおいても、調査ではワークシートを用意しました。必要事項を聞き漏らすことがないように、また調査者が複数人にわたるため誰がおこなっても内容に大きな差がでないことや、調査結果を誰もが使えるようにすることを意図して、質問項目を設定しました。記録することに不慣れであっても、聞き取りというおしゃべりを同じ型に落とし込むための手がかりとなります。ワークシートは、A5サイズのカー

ド型で、1 事項ごとに 1 枚使います。聞き取りの内容ごとに調査項目は異なりますが、ほぼ同じ体裁です。

プレワークショップでは、3 ヶ月分が 1 枚に構成されたカレンダー 1 年分と、家庭ごとの行事とそのときに食べる料理についてのシートが用意されました。まずカレンダーに 1 年間の行事を書き込み、続いて行事のシートを用いて 1 件ずつ聞き取りをし、行事の詳細と料理について調査していきます。「家族の暦・うちの行事」シートの項目は、行事名など、いつやるのか、いつからやっているのか、参加する人、おきまりの料理（アリ、ナシ）、なぜ集まるのかどんなことをするのか、行事のおきまりなど、で構成されています。「家族の暦・おきまり料理」シートの項目は、料理の名前、これを食べる機会、これを食べる理由（縁起がよい、習慣、伝統、好物だれの？、そのほか）、思い出、詳しい理由、我が家ならではのことで、レシピなど、となっています。いずれのシートにも、経験の持ち主、調査者、調査日の記入欄が設けられています。

フィールドでの調査では、4 種類のシートが用意されました。だんじり祭りにおける音の調査のために「だんじりの音・お囃子・かけ声」シートが用意されました。項目は、だれが（一緒にやる人数や構成など）、いつごろ（昭和平成〇年ごろ〇才のとき）、何を使ってどんな音をどんなタイミングで、となっています。（図1）だんじり祭りにまつわる年間を通してのできごとについては

「だんじりの暦・この時期にこんな事」シートを用意しました。（図2）項目は、行事名など、いつやるのか、いつからやっているのか、参加する人、なぜ集まるのか、どんなことをするのか、行事のおきまりなど、おきまりの料理（アリ、ナシ）です。料理のみにチェックがつけば「だんじりの暦・おきまり料理」カードで続く調査を行います。（図3）このカードの項目は、料理の名前、これを食べる機会、作る人、これを食べるメンバー、思い出、詳しい理由、その地区その家ならではのことで、レシピなど、これを食べる理由（縁起がよい、習慣、伝統、好物だれの？、そのほか）、思い出、詳しい理由、その地区・その家ならではの

だんじりの音 お囃子・かけ声
何を使って、どんな音を、どんなタイミングで

だれが

一緒にやる人数や構成など

いつごろ

昭和・平成 年ごろ
19 年代・20 年代
☆和暦西暦のどちらかに記入
()才のとき

調査者

調査日 年 月 日

調査地区

語り手 ()才

図1 だんじりの音:お囃子・かけ声

だんじりの暦 この時期にこんな事
いつやるのか いつからやっているのか

行事名など

いつやるのか

いつからやっているのか

参加する人

なぜ集まるのか、どんなことをするのか、行事のおきまりなど

おきまりの料理
 アリ
 ナシ

調査者

調査日 年 月 日

調査地区

語り手 ()才

図2 だんじりの暦:この時期にこんな事

だんじりの暦 おきまり料理

料理の名前

これを食べる機会

作る人

これを食べるメンバー

思い出、詳しい理由、その地区その家ならではのことで、レシピなど

これを食べる理由
 縁起がよい
 習慣、伝統
 好物 だれの?
()
 そのほか

調査者

調査日 年 月 日

調査地区

語り手 ()才

図3 だんじりの暦:おきまりの料理

はのこと、レシピなど、です。加えて、だんじり祭りについての思い出全般を記録するシートも用意しました。「だんじりの思い出・あんな事こんな事」シートです。(第2章とびら)だんじりへの関わりは、行事の主催側でなくとも、さまざまな形で人々の中にあるはずで、幼いころの参加や、同じ行事であっても各家庭ごと家族ごとの役割のちがいなど、その人それぞれの思い出があり、それらをすくい取りたいと考えました。(佐藤)

(4)だんじり祭りの調査

プレワークショップを経て、7月18日より聞き取り調査を開始しました。9月13日まで行われた21回の調査で、延べ46名の市民学芸員が参加しました。大東市内には、曳行中止している団体も含めて、34のだんじりに関連する団体があります。各団体に、「料理」「思い出」「行事」についての聞き取り調査を依頼し、市民学芸員2~3名が1チームとなり、前述のワークシートを手に調査に行きました。調査期間は、「幕干し(土用干し)」や「コマ掘り」といった保存会の行事を行う時期でもあり、多くの調査はこれらの行事の際に行いました。

(写真1)そのため、団体によっては1名、なかには10数名という人数の方が調査に協力いただきました。



写真1 虫干しの際に調査をする市民学芸員

(5)調査のまとめ

調査を振り返ってみると、「保存会」に対する聞き取りと、「個人」に対する聞き取りが混在していたことがわかりました。保存会の方のなかには、だんじりの「料理」「思い出」は個人に属するもの、「行事」は保存会として行っているものという意識があり、個人的な「思い出」を聞きだしたくても、聞けない場面があり、学芸員が調査に行く以上に調査前の説明を丁寧に言う必要があることを痛感しました。

それでも、こちらの意図をくんで、さまざまな世代の男女で集まってくださった団体からは、終了後、「自分たちの上の世代がどうやっていたのかは、改めて聞く場がなかったので、興味深かったです」と意見がありました。調査をする市民学芸員やその先の展示を見る来館者のみならず、調査を通じて地域でも「記憶」を共有する場を創出できたものと思います。(武井)

3. 市民学芸員による展示

市民学芸員による調査の成果は、展覧会「だんじりの記録、だんじりの記憶」において公開されました。タイトルにおける「記録」は3D計測等によるだんじりの形状記録とその研究成果を、「記憶」は市民学芸員らとの調査で得られただんじりに携わる人々の記憶に関わることを内容としました。「だんじりの記録」についての詳細は第1部をご参照ください。ここでは、

市民学芸員の調査をもとにした「だんじりの記憶」の展示について報告します。

「だんじりの記憶」の展示では、1) 大東市内のどの地域でどのようなだんじり祭りがなされているのかが把握できること、2) 聞き取りで得られた年間行事がわかること、3) 地域の人たちの思い出を紹介すること、の3視点でまとめることにしました。「だんじりの記憶」の展示には、61.2㎡の1部屋を充てました。

(1)大東市内のだんじり(第2部 第2章・第4章参照)

来館者が大東市の地形とそこに存するだんじりの位置関係を把握できるように大東市の地図を置きました。部屋の中央に配置したアイランドの上に白地に黒線の大東市全図を置き、色別された番号札を配して地区を表しました。各地区のだんじり祭りに関わる情報は、地区ごとに1個の立方体(以下、地区キューブと表記)にまとめました。10cm²の各面に対応番号、団体名、写真、祭礼日、神社名などを表しました。地区キューブは、地図の周囲を取り囲むように配置し、鑑賞者が手に取って面を変えながら見たり、好きな場所に置き換えたりできます。(写真2)



写真2 大東市内のだんじり
地図と地区キューブ



写真3 だんじりの暦



写真4 思い出キューブ

(2)だんじりの暦(第2部 第3章参照)

調査で聞き取りをした「行事」に関する項目を、年間の「暦」として情報を整理しました。1月から12月の年間スケジュールのなかで、「秋祭り」以外にどのような行事をしているかを一覧できるようにしました。

ここでは、調査をひとつのものにまとめるのではなく、各調査者ごとの記録をもとに「誰が、どの地区で、誰から聞いた、何について



写真5 来館者の記入する思い出キューブ

の」調査なのを明記したカード形式の展示としました。調査によるデータであることをそのまま可視化したデザインが、月ごとの流れのなかに配されています。(写真3)

調査の過程で撮影した写真は、50～100字程度の解説を添えて壁面に展示しました。

(3)だんじりの思い出(第2部 第4章参照)

中央のアイランドの上からは、8cmの立方体がつり下げられました。これは、だんじりに関わる個人の思い出を書き込んだものです(以下、思い出キューブと表す)。(写真4)なかには地域特有の思い出もあり、地区名を書き添えることにしました。思い出キューブは、展示会場内にも立方体の展開図用紙を用意し、来場者がその場で思い出を書き込んで作成することができるようにしました。会期中に増えていく思い出キューブは、展示に追加されました。(写真5)

(4)まとめ

アイランドの地図では、だんじり祭りが地域ごとに共通点や相違点を持ちながら市内に広がっていることと、そこには市民それぞれの思い出があるのだということを表現しようとしています。展示に表されているように、だんじり祭りは保存会を通じた地域の文化としての面と、個人的な思い出という側面があわさって受け継がれていると言えるでしょう。また、曆に表された地区別の調査内容を見ると、同じ行事でも、保存会によって、地区によって少しずつ異なっていることが確認できます。(佐藤)

4. 市民と共働する学芸活動 —考察にかえて

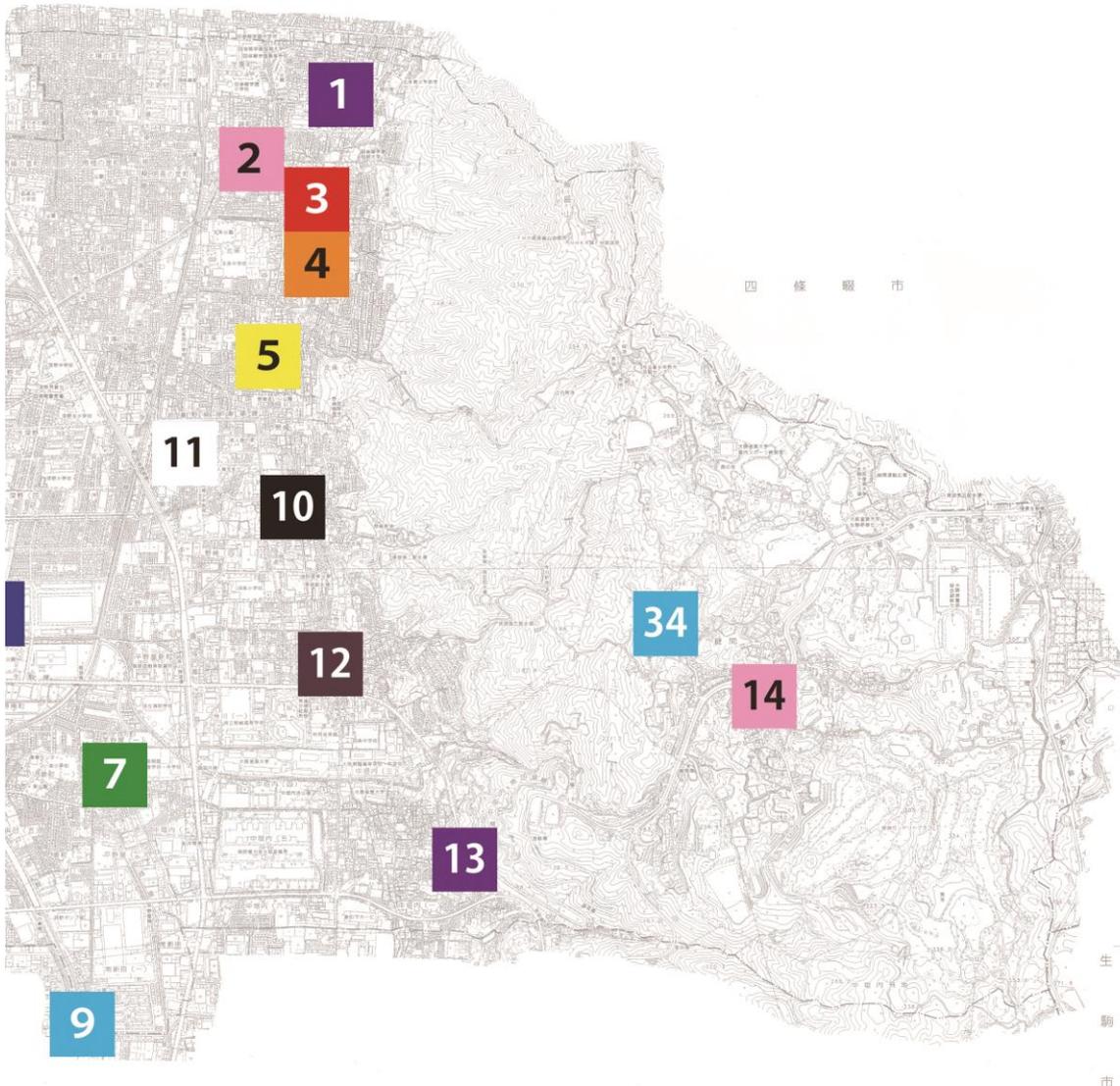
市民学芸員の「やりたいこと」「できること」「学びたいこと」「活かしたいこと」は、人によりさまざまです。今年度は、学芸員提案事業として「だんじりの調査と展示」を行っていくなかで、市民学芸員の提案事業として「まつりの音・まつりの声」という活動が始まりました。これは、市民学芸員の「かけ声っているいろいろあるんや」「お囃子も地区によってちがうで」などというやりとりの中からでてきました。この活動は、地区により異なる「かけ声」や「お囃子」について調査、展示することを目標としています。そこで、今回の聞き取り調査では、「まつりの音・まつりの声」と題した調査を行いました。やりたいことが多様であるのと同様に、その「調べ方」や「まとめ方」にも個性がありました。

今年度の活動を振り返ると、ワークシートがあることで、複数人で共通した内容を調べることが可能になりました。また保存会との連絡や調整、成果の来館者への還元は学芸員らが担いました。

市民学芸員と共働して調査や展示などの学芸活動を進める中で、実行委員会のメンバーや学芸員という専門職の役割は環境整備につくるのではないのでしょうか。調査の道筋やヒントを示すこと、人的な橋渡しを行うことで、市民学芸員ひとり一人の希望や個性を活かしながら活動を展開していくことができると考えます。(佐藤・武井)



- | | | |
|----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 東之町地車保存会 | 7 平野町地車保存会 | 13 中垣内地車保存会 |
| 2 北之町地車保存会 | 8 谷川地車保存会 | 14 龍間自治会 |
| 3 中之町地車保存会 | 9 南新田・元町青年団 | 15 西ノ口若中 |
| 4 四條之町地車保存会 | 10 野崎第一地車保存会 | 16 江ノ口北若中地車会 |
| 5 辻之町地車保存会 | 11 野崎第二秋祭実行委員会 | 17 江ノ口南若中地車保存会 |
| 6 深野北西ノ宮地車保存会 | 12 寺川地車保存会 | 18 大箇だんじり会 |



- 19** 下野地車保存会/下野地車若中/住道青年団
- 20** 押廻地車保存会
- 21** 奉賛会(御供田)
- 22** 灰塚だんじり保存会
- 23** 大野地車保存会
- 24** 朋来地車保存会

- 25** 氷野地車保存会
- 26** 赤井消防団
- 27** 御領地車保存会
- 28** 東諸福地車保存会
- 29** 西諸福地車保存会
- 30**
31 新田地車保存会

- 32** 太子田地車保存会
- 33** 深野西村若中
- 34** 経寺若中

1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月

大箇だんじり会	
通年	
名称	お囃子の練習
語り手	山本章夫さん
1年を通じて、毎月1回深北緑地公園で太鼓・鉦による囃子方の練習をしている。10月に入るとまつりまでは毎晩、町内で行うようになる。現在は、だんじり会のなかに「太鼓中」が中心となって練習を行っている。練習には老若男女を問わず、誰でも参加できる。	
調査員	中西昭治、水永八十生



野崎第一地車保存会	
平成27年7月5日	
名称	御守づくり
語り手	野崎第一地車保存会
曳行中に身につける御守を作成する。木片に焼印を入れたあと、紐を通す。その後、南條神社にてお祝いをしてもらう。	
調査員	資料館学芸員



御領地車保存会	
3月	
名称	総会
語り手	御領地車保存会
3月に総会を開き、役員を選出などを行う。その年のコマ入れ、みがき、囃子の練習、舞台組みなどの日程は、8月の集会で決めていく。	
調査員	柿木薫

野崎第一地車保存会	
平成27年7月18日	
名称	夏祭りの奉納太鼓
語り手	野崎第一地車保存会
南條神社の夏祭りにおいて、子どもたちが囃子を奉納する。その後、神事が執り行われ、巫女による湯上げがある。使用した笹は、無病息災であるといい、各自家に持ち帰る。	
調査員	柿木薫、小泊繁美、中村義之、森本長茂



西諸福地車保存会	
3月	
名称	ふれあいフェスタ
語り手	西諸福地車保存会
保存会の行事ではないが、東諸福中学校で行われる「ふれあいフェスタ」に、お囃子が参加する。ここ10年程続いており、卒業を控えた小学校・中学校の子どもたちがお囃子を披露する場となっている。	
調査員	資料館学芸員

北之町地車保存会	
平成27年7月19日	
名称	コマ掘り
語り手	小阪賢治さん
水に浸けているコマを引き上げる。8月の後半には引き上げる。早く乾かすほうが、磨耗が少ないと伝わっている。	
調査員	氏原稔夫

北之町地車保存会	
4月～10月	
名称	五ヶ町合同のお囃子の練習
語り手	小阪賢治さん
スタートは4月から。月一回、最終日曜日に境内で五ヶ町合同で練習をする。お祭りの一週間前からは地車格納庫の前で毎日練習する。	
調査員	氏原稔夫

深野北（西ノ宮）地車保存会	
平成27年7月19日	
名称	夏まつり
語り手	ナカムラさん
7年前に発足した深野北太鼓会の練習成果をお披露目する場として、太鼓会が主催して夏まつりを行う。会場にはだんじりに付ける幕を張り、以前はお盆の前後に行われていた幕干しを兼ねている。	
調査員	柿木薫、小泊繁美、中村義之

平野屋地車保存会	
6月～10月	
名称	お囃子の練習
語り手	川邊さん
お囃子に楽譜はなく、耳で聴かせて伝えている。「太鼓クラブ」を組織してお囃子の練習に取り組んでいる。6月末10月までから土曜日の夜に公民館へ集まる。対象は中学生から20歳ほどだが、近年参加者は女性のみになっている。	
調査員	柿木薫、小泊繁美、中村義之、水永八十生、森本長茂

江ノ口南若中地車保存会	
平成27年7月26日	
名称	虫干し
語り手	山口さん、中村さん他、保存会の方々
大阪天満の天神祭にあわせて虫干しを行っており、地車庫の近くで幕や提灯を干す。風通しと点検を兼ねて行っている。	
調査員	氏原稔夫、田尻憲章



下野地車保存会・下野地車若中・住道青年団	
平成 27 年 7 月 26 日	
名称	虫干し
語り手	橋本泰次さん
土用の丑の日前後に、虫干しをする。幕や提灯を長時間外に出すと日焼けするので、1時間程度にしている。昔は「蔵開き」といい、お祓いをしてから、風を通していた。	
	
調査員	中西昭治、水永八十生

北之町地車保存会	
7 月	
名称	幕干し
語り手	小阪賢治さん
7 月に、箱に収めてある提灯と幕を干して点検をする。幕や提灯などを管理する什物係がいる。	
調査員	氏原稔夫

中垣内地車保存会	
7 月	
名称	コマ清掃
語り手	中垣内地車保存会
7 月に、コマを浸しておく水槽の掃除をする。	
調査員	小泊繁美、森本長茂

中垣内地車保存会	
7 月	
名称	土用干し
語り手	中垣内地車保存会
7 月に幕と笹振りが付ける化粧回しを干して点検をする。化粧回しは玉嵐より寄贈されたもの。	
調査員	小泊繁美、森本長茂

南新田・元町青年団	
7 月～10 月	
名称	お囃子の練習
語り手	安川勉さん
太鼓保存会の名前で、中学生までの子の練習をしている。7 月頃より週一回公民館で練習している。15～16 年前には、曳行時のお囃子はあったが、だんじり囃子はなかった。御供田の松田さんに教えてもらい、現在は教えを受けた子が大きくなり、指導にあたっている。	
調査員	柿木薫

野崎第一地車保存会	
平成 27 年 8 月 2 日	
名称	土用干し（虫干し）
語り手	野崎第一地車保存会
8 月第一週目の土曜日、又は日曜日に行う。飾り幕、提灯、たすき、腕章等を公民館の室内で陰干しする。昔は民家や寺などに分散して保管しているものを、それぞれ梅雨明けに虫干ししていた。	
	
調査員	浅野純郎、中西昭治、森井綾乃

押廻地車保存会	
平成 27 年 8 月 9 日	
名称	役員会
語り手	押廻地車保存会役員の方皆さん
だんじりの曳行や囃子の練習といった秋祭りの運営だけでなく、押廻地車保存会の組織運営についても話し合う。備品管理部、青年教育部、曳行部といった部会があり、それぞれの役員が 20 名程度集まる。	
	
役員会で聞き取り調査に協力いただく。	
調査員	森本長茂、小泊繁美

中之町地車保存会	
8 月上旬	
名称	幕干し
語り手	中之町地車保存会
現在の幕は刺繍が厚くて畳めないため、かけたままの状態でも保管しているが、昔は箱に収納していたので、8 月の第一週に幕干しをおこなっていた。幕干しは点検でもあるので、繕いは女性が担当していた。幕干しをするときは決まってスイカを食べていた。	
調査員	柿木薫

東之町地車保存会	
8 月お盆前	
名称	コマあげ
語り手	中井和真さん
盆前より、だんじりのコマ（車輪）を水槽から出す。出したコマは、地車庫のなかで、まつりの一週間前まで乾燥させておく。水槽は、1.8m 程の深さで、水を入れた状態でコマを引き上げる。カシ材の芯棒は、水中に沈んでいるため、ロープを結びつけておき、そのロープを探し、引き上げる。保存会の 3～4 名が集まり行う。	
調査員	資料館学芸員

下野地車保存会・下野地車若中・住道青年団	
8 月中旬～10 月中旬	
名称	お囃子の練習
語り手	橋本泰次さん
練習は、8 月のお盆明けより行っており、小学生から高校生 20～30 名が毎週火・木に練習をしている。子どもたちは、まつり当日にだんじりの下にのり、お囃子を演奏する。練習は個人宅で行っていたが、だんだんと苦情が多くなってきた。	
調査員	中西昭治、水永八十生

東諸福地車保存会	
8月頃	
名称	虫干し・土用干し
語り手	橋詰さん、作本さん、北村さん、中村さん、長田さん
8月にやったりした。だんじり曳行中止中も幕だけは虫干しをやっていた。	
調査員	小泊繁美、中西昭治、水永八十生、森本長茂

龍間自治会	
8月～10月	
名称	お囃子の練習
語り手	龍間自治会
8月ぐらいから練習をはじめ、子どもは14～15名で、総勢で35人程度が練習をしている。	
調査員	資料館学芸員

野崎第一地車保存会	
平成27年9月13日	
名称	コマあげ
語り手	野崎第一地車保存会
だんじりの車輪(コマ)は、松材でできており、通常は干割れを防ぐため、水に浸けている。お祭りの一ヶ月前より、水から引き揚げ、乾燥させる。	
	
調査員	柿木薫、田尻憲章、中西昭治、中村義之、水永八十生

中之町地車保存会	
9月末頃	
名称	コマ掘り
語り手	中之町地車保存会
今はコマ保管用の水槽にいられているが、昔は川の底に埋めていた。泥の中から掘り出すので「コマ掘り」と呼んでいる。川が改修されたので、水槽に入れるようになった。川底に埋めるため、コマの穴にワラを詰め、泥で重くならないようにした。祭礼の2週間前に行う	
調査員	柿木薫

灰塚だんじり保存会	
9月～10月中旬	
名称	囃子の練習
語り手	野村拾志さん、乾陸浩さん、福井修治さん
9月の名月から公民館で練習する。騒音対策のため、タイヤにガムテープを巻いて太鼓とし、洗面器を鉦に見立てて練習をする。まつり直近になってから、神社の境内で、本格的な練習をはじめた。	
調査員	小泊繁美、森本長茂

大野地車保存会	
9月～10月	
名称	お囃子の練習
語り手	大野地車保存会
現在は9月1日より毎日練習しており、19時からは小学生、20時からは大人が練習する。かつては、5月ころより鶴見緑地で練習していたこともある。	
調査員	小泊繁美

朋来地車保存会	
9月～10月	
名称	囃子の練習
語り手	山中治さん、子ども会
9月より囃子の練習をはじめ。小学生・中学生・高校生・18才以上の青年団という順番で、それぞれ1時間の練習をする。18時から指導にあたる者が少ないため、小学生は4年生以上という制限を設けている。指導にあたっているのは、保存会会長の山中さん。小学生の練習時間には、子ども会が付き添う。	
	
調査員	資料館学芸員

氷野地車保存会	
9月～10月	
名称	お囃子の練習
語り手	田中収さん、木村秀雄さん、吉川保さん
お囃子は天神囃子をベースにして、独自のアレンジを加えている。練習は15日の砂もち行事以降、お祭りまでに15回程度設定する。早い時間は子ども会が練習をし、それ以降の時間で他のメンバーが練習をする。	
調査員	資料館学芸員

東諸福地車保存会	
9月～10月	
名称	お囃子の練習
語り手	橋詰さん、作本さん、北村さん、中村さん、長田さん
9月のはじめから練習をする。小学生50人くらいが参加する。囃子を叩かせる前に洗面器を鉦にみたくて叩く練習をするときもある。世代伝承には気を使い、お祭りの日や掲示板、チラシなどで啓発している。そのため子どもは多く通ってもらえる。	
調査員	小泊繁美、中西昭治、水永八十生、森本長茂

10月

新田地車保存会	
9月～10月	
名称	獅子舞
語り手	新田地車保存会 和田義己さん、 同相談役 戸野谷益之さん
<p>まつりの一ヶ月前より週1回の練習をはじめ、10月にはほぼ毎日練習をする。本宮の朝に、獅子舞を披露する。</p> <p>由 来：戦後青年団で氏子を一軒一軒まわり、獅子舞を行っていた。一時中断していたが、昭和63年に消防団が獅子舞を習い、復活する。現在は、消防団と保存会の「獅子舞担当」によって行われている。</p>	
調査員	資料館学芸員
太子田地車保存会	
9月～10月	
名称	お囃子の練習・お祭りの準備
語り手	太子田地車保存会
<p>9月の第二土曜日よりお囃子の練習をする。9月の火・土、10月の火・木・土、19時～21時に子どもたちが練習する。保存会の若手が指導にあたり、保存会の他のメンバーは、まつりの準備を進める。21時から、大人の練習が始まる。</p>	
調査員	資料館学芸員
江ノ口北若中地車会	
10月1日～10月中旬	
名称	お囃子の練習
語り手	江ノ口北若中地車会
<p>10月1日よりほぼ毎日行う。19時～21時までが子どもの練習、21時から30分で大人が練習する。太鼓当番があり、当番の者が子どもたちに教えることになっている。20名程で練習をしている。</p>	
調査員	森井綾乃、森本長茂
奉賛会（御供田）	
10月上旬	
名称	試験曳き
語り手	早川啓一さん、隅田定男さん、山中勝治さん
<p>実際にルートを曳行することで、コマや芯棒の点検やルート上で気づいたことなどの確認を行う。奉賛会、青雲会が行う。</p>	
調査員	氏原稔夫、小泊繁美、森本長茂
寺川地車保存会	
10月上旬	
名称	のぼりた 幟立て
語り手	北村公一さん
<p>10月上旬に、大谷神社の参道、公民館前に幟をたてる。大谷神社は幟をたてるものがないので、単管で手すりのようなものを拵えるため、朝から昼すぎくらいまでかかる。</p>	
調査員	資料館学芸員



氷野地車保存会	
10月20日	
名称	本宮
語り手	田中収さん、木村秀雄さん、吉川保さん
<p>以前は祭礼日にあわせて曳行をおこなっていた。現在は南郷まつりにあわせて曳行日を定めている。曳行に関わらず、20日本宮には湯あげをおこなう。大阪天満宮の官司に毎年きてもらっている。</p>	
調査員	資料館学芸員

四條之町地車保存会	
10月中旬	
名称	お囃子の練習
語り手	四條之町の方々
<p>本格的には、1週間前から練習。書いたものはなく、口で教え、耳で覚えていく。北条5町は同じ太鼓なので、それぞれの町で練習しているとズレがでくる。そこで毎月1回の合同練習で合わせるようにしている。保存会太鼓部が小中学生の指導にあたる。</p>	
調査員	柿木薫、中村義之

灰塚だんじり保存会	
10月中旬	
名称	まつりの食事
語り手	野村拾志さん
<p>現在は、みんなで昼・晩とお弁当とおでんを食べる。おでんだけは準備する。昔は各家庭でかしわ（鶏）のすきやきと生節の押寿司をつくった。</p>	
調査員	小泊繁美、森本長茂



氷野地車保存会	
10月中旬	
名称	コマあげ
語り手	田中収さん、木村秀雄さん、吉川保さん
<p>10月の中旬にはコマあげが行われる。およそ秋祭りの一週間前で、水に浸したコマを引き上げ、曳行に備えて乾燥させる。以前は神社脇の水路に浸けていたが、現在は境内の井戸に置いて管理している。</p>	
調査員	資料館学芸員

御領地車保存会	
10月中旬	
名称	宵宮
語り手	御領地区の方々
<p>現在は宵宮では、消防団、自治会など各種団体が、おでん、焼きそば、焼き鳥、スーパーボールなどの出店を出す。安価なので、子どもたちが集まってくる。むかしは女性を中心となり、じゃがいも・大根・蒟蒻・厚揚げ・ごぼう天・ちくわ・スジ・たまごなど8品目の関東炊きを200食分つくり、収益をあげた。</p>	
調査員	柿木薫

深野西村若中	
10月 21・22日	
名称	秋祭り
語り手	池田勇さん、中川弘之さん
現在は、だんじりの曳行こそないものの、秋祭りは執り行われている。宵宮である20日の晩に神事を、21日朝に湯あげを行っている。三箇菅原神社の神主が祭事を行うが、北条や平野屋の神主にきてもらったこともある。	
調査員	資料館学芸員

辻之町地車保存会	
10月	
名称	コマ出し
語り手	辻之町の方々
例年10月頃より、地車庫まえのピットよりコマを引き上げる。昔は川のなかに埋めていたが、水害の後、河川工事があり、現在の場所に移動した。	
調査員	柿木薫、中村義之

谷川地車保存会	
10月	
名称	飾り付け
語り手	松村さん
谷川は、本宮だけの曳行であるが、朝はやく曳行するために、路上駐車などがあると曳行できない。そこで、事前にだんじりの曳行がわかるように、前日の夜に、地車庫よりだし、飾り付けをして置いている。	
調査員	資料館学芸員

野崎第二秋祭実行委員会	
10月	
名称	秋祭り
語り手	良さん
当日は8時からお祓いが行われる。午前中は地元から参道商店街へ、午後はまた再び地元を曳行する。当日のうちにコマも含めて片付けてしまう。食事は、朝は各自でとり、昼はカレーライスが恒例となっている。カレーライスは依然はおでんであった。夜は宴席を設けている。	
調査員	資料館学芸員

寺川地車保存会	
10月	
名称	御幣切り
語り手	北村公一さん
お祭り直近の大安を選び、御幣を切る。紙の上に型を乗せ、切っていく。つくり終えた御幣は、まつり当日までおき、当日にひるげる。	
調査員	資料館学芸員

朋来地車保存会	
10月	
名称	秋祭りの昼食
語り手	中芝さん
保存会、青年団、子ども会などのお祭りに関わる人々の昼食や夕食のために、有志の方々がおでんをつくっている。前日よりあつあげ・卵・大根・スジの下ごしらえをし、当日は配膳もする。現在、4名～7名程度で行っている。	
調査員	資料館学芸員

朋来地車保存会	
10月	
名称	打ち上げ
語り手	青年団長、青年団の方々
10月末に、みんなで集まって飲みに行く。居酒屋に行くので、高校生以上が参加する。打ち上げの他にも、年間を通じて、青年団ではよく飲みに行っている。	
調査員	資料館学芸員

太子田地車保存会	
10月	
名称	本宮
語り手	太子田地車保存会
10時から湯あげ神事を行う。14時から曳行し、17時前には帰ってくる。素早くご飯をすませ、17時30分頃～19時まで夜曳をする。19時からのビンゴ大会には300人以上が集まる。その後、宮入をして、餅まきが終わるのが、22時前後。	
調査員	資料館学芸員

谷川地車保存会	
11月	
名称	北小まつり・谷中まつり
語り手	松村さん
学校行事のなかで、太鼓をトラックで運び、囃子の披露をしている。ここでのPR効果もあり、お囃子の練習には、小学生～中学生およそ20名程度が集まっている	
調査員	資料館学芸員

東諸福地車保存会	
12月	
名称	しま終 <small>しま</small> い天神
語り手	橋詰さん、作本さん、北村さん、中村さん、長田さん
12月に奉賛会の年終わりの会合をおこなう。保存会は毎年のように会合をやって楽しんでいる。	
調査員	小泊繁美、中西昭治、水永八十生、森本長茂



だんじりの思い出

『だんじりのライトアップ』 2年前までは、まつり一週間前に地車庫よりだんじりを半分程、曳きだしていた。台棒をつけないまま出すので、前後へ曳きだすことはできても、左右に向きを修正することができない。

『だんじりの夜番』 現在も、宵宮の晩から朝まで、外に置いてあるだんじりを20～30代の若手が番をすることになっている。若手にしてもらい、年配の者は引き上げている。



大東のだんじり

団体名：東之町地車保存会

神社：北條神社 祭礼日：10月20日・21日

だんじり

一代目のだんじりは、明治36年に東大阪市五条から購入し、昭和26年まで曳行していた。現在のだんじりは、昭和27年に富山県井波で、彫師野村清太郎、野村一宝によって作られたものである。

お祭り前の一週間

お祭り前の一週間からだんじりを飾り付け、コマを入れている。19時～20時45分まで地車庫を開けて、ライトアップしただんじりの前で太鼓の練習をする。1日前には模擬店をだして前夜祭を行い、まつりの前の期間を盛り上げる。



曳行中のだんじり



五町合同練習



だんじりの思い出

『**曳行中断**』 知っている限り、昭和 19 年・20 年は中止しており、昭和 40 年代の 10 年間は中断していた。また、昭和 63 年（平成元年）も自粛している。

『**曳き手**』 昔の青年団の曳行は、130 人ほどいたが、いまは 40 人ぐらいで曳いている。

『**お花**』 お花集めは、昔はお祭り当日に行っていた。法被を着て御幣をもって回った。毎年まわってる花屋では「花くんははれー」、「なんの花やねん！」というかけあいになる。

『**料理**』 かしわのすき焼き、ごぼうの昆布巻き、フナの干物、餡餅など。



大東のだんじり

団体名：北之町地車保存会

神社：北條神社 祭礼日：10 月 20 日・21 日

だんじりの御幣

北之町の御幣はいわゆる一般的な紙垂ではなく、ぼんてんの形をしている。毎年作り変えるのは困難なため、会館で保管し、五年毎くらいで作り変える。つくり方については山下實さんが細かく図入りで残してくれた。

曳行ルート

昭和 32 年頃までは、四条畷の駅まで曳行していた。神社への宮入もおこなっていて、宵宮ではにわかしばいが演じられた。俄芝居は宮入をやめた後もしばらく境内下の段々畑で舞台を組みおこなっていた。お花集めも曳行路の四条畷駅を中心にまわった。



まつり当日のだんじり



平成 21 年の大修理



だんじりの思い出

『電線ぶらさがり』 30年ほど前、屋根に乗っていた人が電話線にひっかかり、屋根から落ちたが、電話線にぶら下がって助かった。だんじりはそのまま進み、次の町のだんじりが通った時にひろってもらった。

『料理』 宵宮の夜、だんじりの番をする人は、すき焼きを食べた。すき焼きはかしわで、松茸も入っていた。かしわのすき焼きはお祭りの後、各家でも食べていた。



大東のだんじり

団体名：中之町地車保存会

神 社：北條神社 祭礼日：10月20日・21日

宮入

昭和30年代までは北條神社まで宮入していた。急坂が続くので、他の町も一緒になって一台ずつ送っていった。宮入していた時は、地車を並べて台棒に板を敷き、舞台をつくって俄芝居にわかしばいがおこなわれていた。

一斉太鼓

神社への参道がアスファルトに舗装されると、コマのすべりが良くなり過ぎて、だんじりを上まであげられなくなった。そのため現在では立て提灯をたて、五ヶ町合同の一斉太鼓を叩く。音頭をとるのはその年の当番町で、どの町からも分かりやすいようにぼんぼりを上げる。



曳行中のだんじり



宵宮の一斉太鼓



だんじりの思い出

『食事』 昔は、飼っていたニワトリで、かしわのすき焼き。女子青年会がネギをとってきて料理する。他に、卵・かんぴょう、みつばなどの巻き寿司。

『だんじりのなかった頃』 子どもの頃、お母さんの実家のだんじりを曳きにいていた。

『道ならし』 地道だったので、秋になると村中総動員で道をならした。

大東のだんじり

団体名：四條之町地車保存会

神 社：北條神社 祭礼日：10月20日・21日

昭和63年

昭和9年に室戸台風でだんじりが流されてしまい、昭和63年までなかった。だんじりがなくてさみしい思いをしていたので、昭和63年にだんじりを曳行できた時には、嬉しかった。

俄芝居

昭和30～34年頃まで、北條神社のところで俄芝居をした。セリフは青年会が考え、「野崎まいり」などを演じた。各だんじりの前に板を渡して舞台としていたため、女性はだんじりにあがれなかったので、男性が女役を演じた。



曳行中のだんじり



宵宮のだんじり



だんじりの思い出

『台棒』 洪水により台棒が流されてしまったため、個人宅のカシの木を切って台棒とした。

『曳行ルート』 阪奈道路の交差点までいったこともある。



大東のだんじり

団体名：辻之町地車保存会

神 社：北條神社 祭礼日：10月20日・21日

由来

だんじりには、「明治三年」という墨書が見られる。その頃より昭和44年までは、青年団が主となり、中断なく、曳行していたと伝わる。昭和44年より昭和52年まで曳行を中断し、それ以降は辻之町地車保存会が発足し、現在に至る。

俄芝居

終戦まもなくは、宝塚歌劇団の暁克美さんがいろいろと演じてくれた。昭和24・25年まで、宵宮の日に神社で俄芝居をしていた。また本宮の日には、十念寺でも俄芝居をした。



まつり当日のだんじり



昭和10年代の俄芝居

だんじりの思い出

『田楽』 もともと田楽は小正月で食べるものだったが、小正月の大トンドができなくなると作らなくなった。最近になって、秋祭りの時に田楽を復活させて食べるようになった。一般の田楽と違い、鯉節で炊いている。(図1)

『曳行ルート』 中断前は住道駅の前まで曳行していた。寝屋川の川筋で過去2回だんじりが転倒してしまったことがある。



図1

大東のだんじり

団体名：深野北西ノ宮地車保存会

神 社：深野北菅原神社 祭礼日：10月20日・21日

お囃子

7年前に太鼓会を発足してから練習用太鼓を増台し、精力的に練習をおこなっている。4月から土曜日の夕方に集まってお囃子の練習をし、近隣自治会の盆踊り、運動会や老人ホームなどからの依頼で、だんじり囃子の演奏に伺う。ただし、本太鼓は秋祭りにのみ叩かれる。

保存会

だんじりの曳行は、昔は各家の長男があつまる若中が中心でおこなっていた。25年ほど前から10年間曳行を中断した時期があり、15年前再開した際に保存会を立ち上げた。曳行を中断していた時は、お宮さんでお飾りかざりをするのみだった。



宵宮のだんじり



太鼓会夏まつり



だんじりの思い出

『曳き手』 40年ほど前、青年団で曳行していた時は人が多くいた。時代とともに減少していき、組織も青年団→消防団→保存会へと変わっていった。近年、曳き手の減少が問題になっている。

『料理』 秋祭りでは、おでんを作り皆で食べるのが恒例となっている。婦人会が中心となり準備をする。



大東のだんじり

団体名：平野屋地車保存会

神 社：坐摩神社 祭礼日：10月20日・21日

平野屋新田会所の屋敷神

坐摩神社は平野屋新田会所の屋敷神として会所の丑寅の方角に建てられた。本町にある坐摩神社から勸請してできた。地車は100年以上たっていると伝わる。秋の祭礼での宮入には「感謝」の意味が込められている。

宵宮

43年前、青年団で曳行していたときには俄芝居にわかしばいもやっていた。いまは宵宮でカラオケ大会、抽選会をおこなっている。平野屋の人口の半分ほどが宵宮に集まって楽しんでいる。



まつり当日のだんじり



坐摩神社の祭礼



だんじりの思い出

『休校』 小学校の時には、おまつりの時には途中で帰ることが許された。だんじりが近づいてくると、帰っていいと言われるので、だんじりにランドセルのせてもらって、帰ったことを記憶している。



大東のだんじり

団体名：谷川地車保存会

神 社：坐摩神社 祭礼日：10月21日

お囃子

一時、お囃子を叩けるものが一人になってしまった。そこで、叩き方を紙に書いてもらったところ、鼓面を叩く「ドン」とフチを叩く「カ」から構成され、実際に演奏してもらい、はじめて理解できた。

食事

まつりに限らず、祝い事には押し寿司がでた。「カツオの生ぶし」をすりつぶした「白」と桜えびをすりつぶした「赤」をのせた、紅白の押し寿司であった。型は家々により様々で、近所の大工さんにつくってもらったりしたようだ。



まつり当日のだんじり



曳行中のだんじり



だんじりの思い出

『肩』 昔の人は肩が強かったのか、コマが長持ちした。今は6～7年で消耗してしまう。

『昼食』 昔は婦人会が白飯とかやくご飯のおにぎりとかくわんを用意してくれた。疲れた体には、美味しかった。

『^{にわかしばい}俄芝居』 50年以上前には、坐摩神社に集る3台のだんじりに、板を渡して舞台をつくり、俄芝居をやっていた。

大東のだんじり

団体名：南新田・元町青年団

神 社：坐摩神社 祭礼日：10月21日

南新田・元町

現在は、南新田が大東市、元町が東大阪市と行政区は分かれているが、かつては一つの地域であった。昔は東大阪市布市まで曳行したこともあり、現在の曳行ルートも東大阪市域も含まれるが、宮入神社は大東市の坐摩神社である。

青年団の打上げ

50年くらい前までは、青年団長の家で、牛肉・松茸を入れたすき焼きを食べた。30人くらいの青年団が集まるために、おでんをつくったり、食器を借りたりするなど、家の人は準備が大変だった。



だんじり(正面)



泉公園に入るだんじり



だんじりの思い出

『食事』 かしわ（鶏）めし、松茸の吸い物、小鮎の昆布巻き、かしわのすき焼き、もち、あわせ柿等を食べた。（図1）

『あわせ柿』 渋柿を湯につけて、渋抜きをする。次第に焼酎で渋抜きをするようになったが、以前は風呂桶や四斗樽で、年よりが湯加減を見ながら作った。



図1

大東のだんじり

団体名：野崎第一地車保存会

神社：南條神社 祭礼日：10月20日・21日

組みだんじり

祝儀を記録する「花帳」^{はなちょう}などを見ると、少なくとも明治時代には若中^{わかなか}の組織で曳行していたことがわかる。当時は組だんじりであったといい、まつりまでは部材別に専応寺などで保管をし、まつりになると組み立てていたという。

俄芝居

昭和40年くらいまで、俄芝居をしていた。昔は宝塚新芸座に行って、それぞれ役を分担し、セリフを聞き書きした。10月1日頃より練習を初め、本宮の夜、だんじりをしまってから公民館で上演した。



現在、曳行中のだんじり



俄芝居



だんじりの思い出

『曳行ルート』 10年くらい前までは、JRの踏切を超えて、深野団地の駐車場まで曳行していた。電車の運行に影響がでないよう、気をつかった。



大東のだんじり

団体名：野崎第二秋祭実行委員会

神社：宝頭神社 祭礼日：一

実行委員会

新野崎自治会・野崎第二地区自治会に住んでいる方を中心として、実行委員会を組織して実施している。毎年、7月～8月に立ち上げ、10月の反省会をむかえて解散。住民であれば、誰でも参加できるようにしている。

由来

昭和58年以前には、お神輿を担いでいたと聞いている。昭和58年、四国からだんじりを解体して輸送してきた。



曳行中のだんじり



新造時のだんじり



だんじりの思い出

『**俄芝居**』 にわかしばい 昭和 40 年頃まで青年団により、らくさく落索として俄芝居をしていた。十林寺などに集り、練習した。

『**道づくり**』 だんじりの曳行前には、地道を整備した。特に参道前は 2 日間ほどかかったという。

『**食事**』 昼食は炊き出しで用意した握り飯と漬物。各家庭では、押し寿司やかしわ（鶏）のすきやきを食べた。

大東のだんじり

団体名：寺川地車保存会

神 社：大谷神社 祭礼日：10 月 20 日・21 日

曳行中断まで

懸装品けそうひんの箱には「明治 20 年」求めたという墨書が確認できる。戦中の中断を経て、昭和 40 年頃までは 15 歳から 25 歳の男女からなる青年会が運営の主体となっていた。昭和 48・49 年に有志による曳行が行われ、翌年に寺川地車保存会ができる。

芯棒のとりもち

寺川は坂が多いため、コマをつける芯棒に、滑りをよくする「グリス」ではなくて、滑り止めのための「とりもち」を使用する。とりもちは、昔も今も購入しているが、鳥獣保護法により昔のものとは違う。



まつり当日のだんじり



昭和 27 年頃のだんじり



だんじりの思い出

『大雨』 例年天気には恵まれていたが、一昨年（平成 25 年）は曳行日が大雨で曳行に苦労した。曳行する道は細いので、曲がる時は大変。（図 1）

『料理』 昔は各家で松茸ご飯、すき焼き（肉・鳥）を食べていた。お祭りの日はスタートが早いため（曳行距離が長いため）、昼食が 10 時半頃になる。お宮さんに戻り、公民館で松茸ご飯を食べる。



図 1

大東のだんじり

団体名：中垣内地車保存会

神 社：須波麻神社 祭礼日：10 月 21 日・22 日

お囃子

お囃子は「須波麻太鼓」と呼んでいる。須波麻太鼓は奉納太鼓であるので、曳行時は叩かない。小学生対象の子供会で子供太鼓教室を毎月第二土曜日に開催している。お囃子の練習ができるよう、神社の上手に練習場を作って練習している。

俄芝居

中垣内では、昭和 40 年代から俄芝居をおこなっている。消防団、青年団、子ども会育成会、中垣内クラブ、地車保存会など各団体が出し物をする演芸大会のなかでおこなわれる。境内には、芝居を演じる舞台が建てられている。



曳行中のだんじり



俄芝居



だんじりの思い出

『二台のだんじり』 かつては、龍間神社に宮入するだんじりと経寺住吉神社に宮入する二台のだんじりが曳行していた。



大東のだんじり

団体名：龍間自治会

神 社：龍間神社 祭礼日：10月21日・22日

トヤ制度

宮座みやざのなかで、輪番でトヤを務める。トヤにあたった家では、昔は宵宮の晩からだんじりをとめ、神事を務める巫女さんを泊めたりしたという。現在では、お仮屋かりやを敷地内に設置し、まつりにかかわる人に接待をする。

現在のだんじり

現在は、龍間自治会としてだんじりの曳行を行っている。担ぎ手は消防団、綱は子ども会が曳いている。土曜日は午後から曳行し、龍間神社に宮入する。20時頃より神事を行う。日曜日は午前・午後ともに曳行している。



曳行中のだんじり



トヤのお仮屋



だんじりの思い出

『だんじりの組み立て』 遠い昔は、祭りが終わるたびに、だんじりを解体し、祭りの前に組み立てていたと伝えられている。



大東のだんじり

団体名：西ノ口若中

神 社：三箇菅原神社 祭礼日：10月19日・20日

わかなか 若中

「若中」という組織で「だんじり」を管理運営しており、西ノ口村の構成各戸により若中組織を構成している。平成9年の復興後は、構成各戸の全員が会員の資格を有し、男性会員が年齢順に一年交代で会長の職を務めることとしている。かつては、構成各戸の長男だけが「帳元^{ちやうもと}」と呼ばれる組織の長を務めることができ、次男以降は、長の職に就けない組織形態であった。

曳行の中断

かつては、村内に地車庫があり、宵宮の日に三箇菅原神社に宮入をしていたが、昭和46年に神社前に地車庫が建設されたため、以降、宮入は行われなくなった。時は経済の高度成長期、交通事情の悪化、曳き手の不足、住民の生活意識の多様化とともに、各村ともに、この翌年から曳行は行われなくなり、平成5年に江ノ口北が曳行を復活するまで完全に中断されていた。



曳行中のだんじり



宵宮の合わせ太鼓



だんじりの思い出

『鶏のすき焼き』 昔、菅原神社では神使が牛しんしなのでまつりの時には、牛ではなく鶏（かしわ）のすきやきを食べた。



大東のだんじり

団体名：江ノ口北若中地車会

神 社：三箇菅原神社 祭礼日：10月19日・20日

帳元

『万年帳まんねんちやう』と呼ばれる文書が受け継がれている。その中に、文政十年（1827）に檀だんざり歳を祝う、とあることから、それ以前より組織が存在し、だんじりに関わっていたことがわかる。この万年帳には、帳元とよばれる組織の長の名が記録されていく。

曳行コース

江ノ口北のある三箇は平野部なので、曳行コースに坂道がない。そのなかでも、寝屋川沿いの西村橋、会所橋の前後は坂になっている。坂道では、力をいれるために「オータ、オータ」というかけ声で、だんじりを曳行していく。



曳行中のだんじり



平成 26 年に新調された幕

だんじりの思い出

『^{くるまいた}車板の龍』 龍の口にボルトが入っている。かつて、曳行中に落ちてきたものをとめている。

『まつりの食事』 まつりの日には、各家庭でちらし寿司を食べる。



大東のだんじり

団体名：江ノ口南若中地車保存会

神 社：三箇菅原神社 祭礼日：10月19日・20日

大太鼓

大太鼓を叩くのは、祭りの時だけである。近所迷惑になり、パトカーが来たので、練習の時は叩いていない。直近の太鼓の張り替えは、平成10年であるが、大きいため、牛皮の入手が困難になってきている。

由来

現在のだんじりは、三代目と聞いている。一代目が新田西、二代目が中之町、現在は四條畷市砂より譲渡されたと伝わる。二代目については、古文書により、大正5年に江ノ口南より中之町へ売り渡したことがわかっている。



大太鼓



江ノ口南のだんじり



大筒だんじり会

だんじりの思い出

『ふるまい酒』 大晦日の23時30分ころよりだんじり会の有志が三箇菅原神社に参集し、初もうでにくる参詣者にふるまい酒をしていた。結構好評を得ていたように思う。



大東のだんじり

団体名：大筒だんじり会

神 社：三箇菅原神社 祭礼日：10月19日・20日

復活までの経緯

昭和初期には、^{わかなか}若中が中心となり曳行、まつりの運営を担っていたが、昭和40年代はじめには引き手が減少し、曳行も途絶えた。しばらくは、村の地車庫で保管していたが、昭和46年に三箇菅原神社の前に現在の地車庫ができ、そこへの移動が最後の曳行となった。

だんじり会の発足

平成6年に「大筒だんじり会」が発足し、現在にいたる。「若中」が長男だけの組織であったのに対し、だんじり会は「正会員」と「準会員」から組織される。現在は、50歳定年制を設け、組織の新陳代謝を図っている。



改修を終えた大筒だんじり会のだんじり



昭和期のだんじり曳行

「大筒だんじりー大筒地車生誕120年記念誌」より



だんじりの思い出

『コマ』 昔は、現南の子公園の南側に川があった。そこにコマを鎮めて保管していた。祭り1ヶ月前頃に、みんなが泥まみれでコマをあげていた。

『曳行ルート』 昔は神社から会所橋—鐘紡—住道駅—神社というルートを通っていた。

『葺開き』 葺開きの後、だんじり小屋であそんだ。だんじりに触っただけで怒られた。

『だんじり』 5~6才の頃、おじいちゃんに乗せてもらった時は、偉い人になったような気分で、とても嬉しかった。

大東のだんじり

団体名：下野地車保存会・下野地車若中・住道青年団

神 社：三箇菅原神社 祭礼日：10月19日・20日

むかしのだんじり

だんじりの制作・購入時期を示す確かな資料はないが、江戸末期と伝わる。当初、祭礼備品は舟で運び、竹橋の浜に引き上げたと聞いている。昭和初期に、横転しないように、柱を1尺程切り、背を低くした。

だんじり復活まで

昭和41年頃、緞帳・太鼓・台棒・横棒・曳き綱を保管していた場所が火災にあい、すべてを焼失。火災を免れただんじりも、以降曳行中止を余儀なくされた。平成5・6年頃より、復興の話がはじまり、平成8年、地元の有志により、祭礼備品を新調し、復興させる。



昭和30年代頃のだんじり



現在のだんじり



だんじりの思い出

『食事』 昔は宵宮に、夜通しだんじりの番をした。その時には、かしわ（鶏）のすき焼きを食べた。

『洗い』 まつり前には、かつて村中にあった向井川までだんじりを運び、消防ポンプなどを使い、水をかけて、ほこりを落としたという。



大東のだんじり

団体名：押廻地車保存会

神 社：三箇菅原神社 祭礼日：10月19日・20日

曳行中止から復活へ

大正期に先代のだんじりが売却され、現在のだんじりは昭和初年に譲渡された二代目という。昭和46年を最後にその曳行は中断、担い手であった押廻青年団も解散した。平成10年に復活にあたり、押廻地車保存会が発足し、今にいたる。

お囃子

宵宮に三箇菅原神社の前で、三箇の六台が一斉に演奏するのが、合わせ太鼓である。その他に、押廻青年団が伝えていた押廻特有のお囃子が存在する。現在では、お囃子を通じて、子どもたちに地域の伝統を継承することを目的の一つとして取り組んでいる。



平成24年に改修した現在のだんじり

昭和30年頃のだんじり



だんじりの思い出

『喧嘩』 御供田橋を渡って曳行する際、他地区のだんじりと鉢合わせになり、道を譲りあいでも喧嘩になった。

『中断』 昭和 60 年頃まで曳行を中断していた時期がある。そのため、部品や提灯などが傷んでいた。



大東のだんじり

団体名：奉賛会（御供田）

神 社：八幡宮神社 祭礼日：10月19日・20日

料理

かつては女性によりおむすび、巻き寿司、仕出しをしてくれて公民館で食事をしてきた。各家庭では、飼っていた鶏をすき焼きにして食べた。現在では、弁当やカレーなどを食べている。

俄芝居

昭和 45 年頃までは、宵宮で境内に舞台を組み、吉本新喜劇のような俄芝居を行っていた。20 年くらい前からカラオケが中心になっており、漫才やバンドを披露することもある。



昭和 30 年頃のだんじり



現在の宵宮の様子



だんじりの思い出

『曳行コース』 70年前には、赤井の堤防までいった記憶がある。

『お迎え提灯』 提灯が長いので、神社の鳥居をくぐるのに苦労した。



大東のだんじり

団体名：灰塚だんじり保存会

神 社：素盞鳴神社 祭礼日：10月19日・20日 ※曳行日は祭礼日前の土日

三代目のだんじり

一代目のだんじりは、村内を曳行できなくなり売却。二代目は昭和58年、三代目は平成17年に購入したものである。二代目を購入する以前に、だんじりを曳行できない時期があったが、お迎え提灯を掲げ、太鼓と鉦をリヤカーに乗せ、宮入をしていた。

宮入音頭

宵宮と本宮の晩に宮入音頭を唄いながら、神社に向かう。宮入音頭は伊勢音頭が変化したものだという。先頭にお迎え提灯、唄を担当する老人クラブ、最後尾に鉦・太鼓という編成で宮入をする。



現在曳行中のだんじり



宮入音頭



だんじりの思い出

『藪入り』 譲渡より3年後、諸口で「藪入り曳行」を行った。だんじりをトラックにのせて移動し、現地で曳行。帰りにトラックが蛇行運転をしているので、不審に思ったが、後から聞くと、御幣をはずし忘れ、信号にあたらぬように運転していたとのところであった。

『横転』 譲り受けして間もない頃、イズミヤの前で横転しかけた。たまたま諸口よりきていた方々に助けてもらい、立て直した。



大東のだんじり

団体名：大野地車保存会

神 社：大野神社 祭礼日：10月19日・20日

現在のだんじり

平成8年より、現在のだんじりで曳行しており、それ以前には神輿であった。だんじりは大阪市鶴見区諸口より譲り受けているが、お囃子や曳行についても、前年より諸口へ練習に行き、伝えたものである。

秋祭りの料理

宵宮はおにぎりと卵焼き、カレー、本宮の昼食は豚汁とおでん、夕食はちらし寿司、にゅうめん、天ぷらが定番となっている。保存会の大人は、朝6時より神事の準備などがあり、用意された料理はほとんど口に入らない。



だんじり背面



曳行中のだんじり



だんじりの思い出

『手作りだんじり』 手作りのだんじりであるために、最初の3～4年は苦勞した。特に資金集めは、盆踊りの時に出店をだし、その売上でだんじりの材料を購入している。

『厳しさ』 子どもの頃から参加していると、昔に比べて厳しくなった。関わる人数も多くなったので、安全面でも厳しくしなければいけないのだろう。

『曳行』 肩がいたい、体がいたいといったことしか覚えていない。

大東のだんじり

団体名：朋来地車保存会

神 社：—

祭礼日：10月17日・18日（平成27年度）

だんじり促進会

だんじりのほぼすべてが手づくりで、現保存会会長の山中治さんをはじめとする「だんじり促進会」の方がつくったものである。当初は「だんじり促進会」が中心となり団地のなかだけを曳行をしていた。

朋来地車保存会

現在は、朋来地車保存会・青年団が中心となり、自治会、子ども会や有志の方の協力のもと、宵宮と本宮の二日間、朝・昼・晩と曳行をしている。また、灰塚、北灰塚、大野とともに南大東連合会として、駅前までパレードを行っている。



制作途中のだんじり



曳行中の現在のだんじり



だんじりの思い出

『料理』 昔は、かしわ（鶏）がごちそうで、正月と秋祭りの日に飼っていた鶏を料理した。また、神社のとなりには淵（池）があって、そこで鮎やハス、しじみを採って調理した。鮎は焼いて干しておき、炊いて昆布巻にした。（図1）



図1

大東のだんじり

団体名：氷野地車保存会

神 社：氷野北野神社 祭礼日：10月19日・20日

北野神社

神社に関する資料では、宝暦八年（1758）に氷野・赤井両村が作成した社殿の修復願の写が伝わっている。もともと一村であった氷野と赤井は明治35年に赤井北野神社が分祀される。現在の社殿は昭和43年に建てられ、以前の社殿で用いられていた象鼻や墓股が残されている。

砂もち

毎年9月15日（または直前の日曜日）に、深野南新田（現在の平野屋新町）の井路から砂を持ち帰り、境内、参道を整備する風習が現在もおこなわれている。秋祭りを前に、場を清める意味があるため、秋祭りの始まりとして捉えられている。



曳行中のだんじり



砂もち

だんじりの思い出



平成 25 年の曳行



平成 24 年の曳行

大東のだんじり

団体名：赤井消防団

神 社：赤井北野神社 祭礼日：10月19日・20日



赤井北野神社前での曳行



だんじりの正面



だんじりの思い出

『食事』 20年前には、10軒ぐらいで一升炊きの炊飯器でご飯を炊いて、黒ゴマふったおにぎりをつくった。あとは漬物、蒲鉾程度。

『わら草履』 昭和51年頃までは、わら草履で曳行していた。鼻緒がきれて、途中ではきかえた。

『稲』 稲刈り前でなので、横綱をもつ人が通る時に稲を踏まないように、稲同士をくくった。

『道づくり』 曳行まで、砂利道なのでこぼこを整備する必要があった。土を置いていた場所のトロッコに乗って遊んでいたら、ひっくり返して怒られた。

『木鼻の鼻』 木鼻の獅子の鼻が擦りむけている。御領は道が狭いので、石垣でこすってしまったため。

大東のだんじり

団体名：御領地車保存会

神 社：御領菅原神社／おかみ籠神社 祭礼日：10月19日・20日



現在のだんじり

現在のだんじりは、今年が最後の曳行となる。大正12年に購入したものであることが、墨書されている。平成28年には、新調された新しいだんじりが初お目見えすることになっている。

にわかしばい 俄芝居

青年団の時には俄芝居をやっていたが、戦争があり途絶えてしまった。その後、宵宮でカラオケ、抽選会、暁伸・ミスハワイといった漫才師を呼んだこともあったが、平成12年に俄芝居を復活。現在は、時事ネタを入れた脚本をつくり、上演している。



現在のだんじり



俄芝居



だんじりの思い出

『事故』 昭和 39 年に屋根から人が落ちる出来事があった。また、小さい頃（小学校低学年の頃）、現在曳いている地車が横転したことがあった。また、神社前の道が今よりも急坂で、上げるのに苦労した。（図 1）

『料理』 生節の押し寿司、松茸の入ったすき焼きなどは、各家庭でお祭りの時に食べられる。役持ちなどで神社へ出ずっぱりだと、家のすき焼きが食べられなかった。保存会ができてからは、姫路からお酒と銀杏を取り寄せ、皆で食べるのが恒例となった。神社ではおでん、どて焼き、かすうどんなど、男衆で作るので簡単なものが多い。



図 1

大東のだんじり

団体名：東諸福地車保存会

神 社：諸福天満宮 祭礼日：10月24日・25日

秋祭り

諸福では祭礼日は24日、25日で毎年固定している。祭神である菅原道真公の生誕・こっきよ 葬去日にちなむ。だんじり曳行を中断していた時期があったが、保存会を結成して再開した。再開にあたり、保存会の基本認識として祭礼日を守ることを徹底した。

お囃子

お囃子には「東風」と「天満」がある。太鼓と鉦で、太鼓が主導で叩く。譜面はなく、聴かせながら耳で伝承している。だんじり曳行を中断していた時期はあったが、昔と今とでリズムなどに変化はない。龍踊りは、今はお囃子に合わせているが、昔は龍の動きを体現したものだった。



曳行中のだんじり



昭和 30 年代の俄風景 にわか

だんじりの思い出

『お迎え』 今から 40～45 年前までは、南郷小学校に青年団の人たちがだんじりを曳いて迎えにきた。次第に音が近づいてくるので、だんじりがくるのがわかった。建ったばかりの新校舎は、まわりに高い建物がなかったので、遠くから近づいてくるだんじりがよく見えた。綱をだして子どもたちにひかせると、よその地区の子たちが羨ましがったことを覚えている。



大東のだんじり

団体名：西諸福地車保存会

神社：諸福天満宮 祭礼日：10月24日・25日

だんじりの新調

現在のだんじりでの曳行は、平成 27 年度秋祭りが最後となる。現在のだんじりは、大正期に、先代のだんじりが焼失し、東大阪市方面より購入したものである。平成 28 年度には、新調しただんじりで曳行することとなる。

宮入音頭

宵宮の晩、19 時頃より 20 時 30 分頃まで宮入が行われる。西諸福公民館より諸福天満宮へ、先頭には御神灯ごしんとうを掲げ、「伊勢音頭」に似た宮入音頭を唄いながら向かう。の際には、だんじりの曳行はない。現在は、婦人会や自治会が中心であるが、かつては男性によるものであったという。



現在曳行中のだんじり



宮入音頭



だんじりの思い出

『にわか』 村の人が芝居をする。芸人を呼んできてやっていたこともある。

『幕だんじり』 新田（東）のだんじりは、獅子をあしらった意匠の幕をつけて曳行していたが、現在はつけていない。そこで、現在はだんじりの懸装品である「巻物」に獅子の意匠を施している。新田（西）のだんじりは、かつて「義経八艘飛び」の図案であり、現在は山王宮大神社の社紋である「三つ巴」の幕となっている。



大東のだんじり

団体名：新田地車保存会

神 社：山王宮大神社 祭礼日：10月19日・20日

お囃子

昔は東と西で鉦の大きさや音色を競い合っていたが、昭和 50 年代には継承者が数名になってしまう。そこで、昭和 59 年に、子ども会で練習をはじめようになり、昭和 61 年には消防団が練習を行うようになり、現在では保存会のなかの鉦・太鼓担当が中心となって担い手の継承を行っている。

秋祭り

秋祭りには、だんじりの曳行だけでなく、獅子舞が披露される。また、神事として、宵宮の夜に「夜神楽」、本宮には「湯神楽」が行われている。「湯神楽」は、巫女が釜湯に酒、米、塩を入れ、笹で熱湯をまき散らします。使用した笹は、頭痛にならない、賢くなると言われ、本宮では頭に笹を挿して曳行します。



新田(東)



新田(西)



だんじりの思い出

『竹取り』 チョヤサに使う竹を取りに行く時に、蚊に刺されて大変だった。

『枝払い』 祭り前に、曳行の妨げになる木を切っていて落ちた。



大東のだんじり

団体名：太子田地車保存会

神 社：太子田大神社 祭礼日：10月19日・20日

奉賛会から保存会へ

平成12年頃までは、奉賛会が中心となり、消防団が協力して曳行していた。平成13年頃より保存会が発足し、曳行を担うようになった。保存会では、会員の紹介により募り、太子田在住の者だけでなく、八尾や徳島在住の会員もいる。

子どもだんじり

宵宮の日には、本宮さながらに子どもだんじりの曳行をする。近隣の保育園でつくってもらったものを、平成20年頃、保存会に寄付してもらった。15時から17時まで曳行し、19時からビンゴ大会をする。その後、宮入をして、菓子を撒く。



平成25年の曳行



だんじりのコマ入れ



だんじりの思い出

『**帳元**』 ちやうもと 若中でもだんじりに乗るのが、帳元である。帳元は若中の長を務め、1年交代であった。

『**宵宮**』 宵宮の夕方より幕をはり、提灯をつけ、夜11時頃までお囃子をしていた。昭和26年くらいまでは、にわかしばい 俄芝居をしており、祭り前には納屋で稽古をしていた。

『**落策**』 らくさく 本宮の次の日である10月22日の夜に宴席が設けられた。若中の他、子どもたちも一緒に、かしわ（鶏）飯、松茸ごはん、すき焼きなどを食べる。持ち回りで各家が場所を提供し、若い衆が買い物や段取りを行った。

大東のだんじり

団体名：深野西村若中

神 社：両皇大神社 祭礼日：10月20日・21日

かつての秋祭り

昭和43年を最後に、曳行は途絶えている。中川弘之さんによれば「祖父（明治10年生れ）から明治26年頃に、門真の馬伏より購入したと聞いている」とのこと、それ以前にだんじりが存在していたかどうかは定かではない。

曳行コース

寝屋川沿いを新深野橋まで北上したのち、来た道を南下し、恩智川を渡り、現総合文化センター近くにあった鐘紡の「モンマエ（門前）」まで曳行した。



昭和32年当時の曳行



だんじりの彫物

大東のだんじり

団体名：経寺若中

神 社：住吉神社 祭礼日：10月21日・22日

だんじりの古記録

提灯や地車庫に関する記録は、江戸末より確認できる。現在も、太鼓や幕などと一緒に古文書を保管しており、今後の調査により、だんじりの制作年代や組織の様子などが明らかになるものと思われる。

曳行

現在は、曳行することはできず地車小屋のなかで保管されている。昭和20年代頃まで曳行していたという。



現在のだんじり



昔のだんじり

展示について

大野木啓人

長年、美術館や博物館の展示を手がけてきますと、私の仕事も失敗や成功例という経験を頼りにいくつかの方法を集約して、無難にまとめ、完成度を上げるだろうと思っていました。しかし今もってあらゆる場面で、「実験と冒険」を繰り返しています。今回の「記録と記憶」展でも今までにないやり方や考え方にチャレンジできたと思います。

その特徴は大きく3つあるとおもいます。1つめは市民学芸員の活動です。地域につながるの深い郷土博物館や資料館は判断が難しいものも多いのですが、全国に990か所もあるといわれています。その中で、当館は本職の学芸員と一緒に、調査や研究、展示まで普通の市民の人々が組織立って行い、活動している数少ない資料館なのです。現場に出かけ、調査をして、実際「ものやひと」と出会いながら理解を深める行為は、それをまとめ上げる展示に大いに役立ちます。それは関わりを深めることで展示に対して「おもしろい」や「ねがい」が深くなるからです。もっと言えば「愛情」かもしれませぬ。今回も市民それぞれが調べ上げた結果が寄せ集められ、発表の場となりました。手分けをすることで、短時間に多くにコンテンツ（内容）を観てもらえました(写真1)。



写真1 市民学芸員の活動の様子

2つめはいつも予算がなくて苦労されています制作費です。少ない予算でどのようにうまく見せるかです。それを克服するには専門業者に任せるのではなく、手作りで経費を抑えたり、時間をかけずに仕上げたり、あるものを上手く使ったり、無駄なことを省く作業です。自分たちで試行錯誤することは確実に展示の技術を身に付けていることになっています。苦心することで思わぬアイデアが生まれたりもします。皆さんの英知がプロ顔負けの展示術になることもあるのです。

3つめは参加型の展示・鑑賞です。子供のころからだんじり祭りに親しんできた人や、運営に関わった人、遠くから観に来た人それぞれがだんじりに対する思いや記憶を書き込むことにより、ひとに伝える機能があったことです。伝えるだけでなく自分の中

で「だんじりとは」を考え、整理・編集できる仕掛けも兼ねていたのです。今回展示は中央に大きな地図を広げました。大東市のどこにどのだんじりがあり、何処を曳行するかが一目でわかるようにしたのです。そして色分けされた大きなさいころの6面に情報を入れました。鑑賞者は手に取りながらそれぞれの町にあるだんじり情報をひっくり返しながらかみ解くようにしました。



写真2 鑑賞参加者が書き込むさいころ

また鑑賞参加者が書き込んだ情報もさいころ型にして鑑賞者に観てもらえるようにしたのです(写真2)。もちろん展示に関わるキャプションパネルや写真もさいころに合わせて、正方形を基本として統一感を持たせました。手作りのキューブというさいころ型の立体は空間に変化を持たせ、手に取らないとすべてが見えないことで思わぬ効果として、鑑賞者を参加に導いたのです(写真3)。



写真3 さいころを使用した参加型展示

展示には規則も法則もありません。でも観に来た人に伝わらなければなりません。興味を持ってもらい、来てみてよかったと思ってもらいたいと展示する方々は思っているはず。市民学芸員の人達はいつもそう思いながら自分たちの地域資料館を通して学び、楽しみ、地域に誇りを持って生きてほしいものです。今後の活躍が大いに期待できる組織だと確信しています。

おわりに

笠井敏光

大阪府に所在する大東市立歴史民俗資料館では、市民が自ら学び、学芸員とともに地域の調査や研究を行う「市民学芸員」制度があります。一方、大東市には30台を超えるだんじりがありますが、その調査手法については確立されておらず、地域を越えた比較研究が困難な状況でした。

そこで、「だんじりを活かした地域共働事業」を昨年度（平成26年度）より計画、実施してきました。まず、市民と学生が調査を行う前に講義や実習、ワークショップなどによって学び、地域に入り調査を行うことで、市民・地域・博物館の連携を強化し、その成果を展示することにより、広く地域の文化振興に結びつけるとともに、関わる人々が交流することにより双方が学びあう人材育成につながる効果もありました。

このモデルは、だんじりという地域の文化遺産を対象として、市民が調査を行うことにより地域を知り、また従来、学芸員によって行われてきた展示が、市民・学生・大学・博物館・地域が交流することによって、新しい視点をもったものとして創造されました。

2年目にあたる今年度（平成27年度）は、だんじりの資料化・アーカイブ化の作業を行うことによって、文化財の新たな保存管理手法の開発になるとともに、他のだんじりとのより詳細な比較検討も可能となり、その成果を地域に還元することによって、地域の共働による地域文化活動にもつながるものとして期待されます。

一方、毎年、秋に行われるだんじりまつりには、地域に暮らす人々の記憶が宿ります。お囃子やかかけ声、まつりの食事や思い出など、人々への聞き取りで明らかになる、目に見えないものです。これらの記憶を目に見える形として展示することによって、共有化を図るとともに、地域の違いを明らかにしました。調査を行う市民学芸員は、地域に出向き、まつりの関係者に聞き取りを行います。市民が市民に聞き、地域のことを知ることが地域資料館のひとつの役割かもしれません。

これまでの二か年度にわたる調査によって、地域に存するだんじりの詳細な比較研究が可能となり、その成果を市民や地域に還元することができました。しかし、デジタルアーカイブは、館内運用に留まり、他に発信するまでには至りませんでした。

今後は、博物館が核となり、だんじりを主題とすることで、市民・地域・大学・行政などを結びつけ、これまでの蓄積を広域かつ多様な層に発信することが必要です。ひとつは、だんじりについてこれまでの調査研究の成果を踏まえた多言語のデジタルアーカイブとして、インターネットを活用した情報発信の充実を図り、その内容を実物とともに展示し、外国人に対する日本文化への理解を深めること、もうひとつは、市民学芸員が企画段階から事業に参画し、これまで形成されてきたコミュニティを活用して調査・展示を実施し、地域と共働することによって地域文化活動の担い手とな

ることを目的とします。

この事業は、地域の文化遺産であるだんじりをテーマとして、市民をはじめとする多様な人材が交流し、それぞれの立場から「だんじりの魅力」を伝え、広げることにあります。

今後、さらなる情報の蓄積と発信、コンテンツの開発が求められるところです。

執筆者紹介

■**笠井敏光** 大東市立歴史民俗資料館 館長

専門は、考古学・文化政策学。市民を主体とする考古学、市民大学や市民学芸員システムの構築とともに、文化プロデューサーとして各地の文化を活かしたまちづくりに関わる。また日韓の市民国際交流ネットワークにも参加している。

■**伊達仁美** 京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科 教授

専門は、民俗文化財の保存修復、活用。昨今の市町村合併により地域色のある民俗資料館の統廃合を懸念し、小学校で民俗資料を収蔵・展示することを提案して、各地の小学校で展示施設を整備している。

■**福原凡香** 原野農芸博物館 学芸員

専門は、文化財の保存修復。修理技術者の経験を基に、紙資料を中心とした歴史資料の保存環境や取り扱い方を研究している。

■**魚島純一** 奈良大学文学部文化財学科 教授

専門は、文化財保存環境の管理。特に十分な設備がなくても行える低酸素濃度処理等を中心とした簡便で実用的な文化財加害害虫の防除法の実践に取り組む一方で、非破壊分析による銅鐸などの保存科学的調査をおこない古代のわざの解明を目指している。

■**藤本悠** 奈良大学文学部地理学科 専任講師

GISの国際標準に関する研究を行っており、現在は様々な地域情報を国際標準に準じて整備する方法について焦点を当てている。また、ビッグデータと呼ばれる巨大データを分析するための方法論の研究も行っている。

■**堀内保彦** NPO法人フィールド 理事長

フィールドは、未評価・未整理な状態の資料をデジタル化と関連技法の研修をおこなうことが目的のNPO。安全・迅速・低コストなデータベース化を目標とし、文化財や資料の負担をかけないように現地での作業を再優先しておこなっている。

■正司哲朗 奈良大学社会学部総合社会学科 准教授

主な研究テーマは画像処理と教育工学。画像処理では、貴重な資料・遺跡をデジタル化している。また、教育工学では情報技術を利用した教育支援を行っている。

■Nyam Munkhbat 奈良大学社会学部

モンゴルからの留学生。2015年4月から奈良大学社会学部の研修員として、文化財のデジタルアーカイブ化に関する研究を行っている。

■溝辺悠介 大東市立歴史民俗資料館 学芸員

専門は、民具学。機能分析をもとに地域差や時代変遷の解明を目指す農具研究。祭礼民具の研究も並行し、京都の剣鉾302基の計測調査、だんじり彫物計測調査を行っている。

■大畑博嗣 大東市立歴史民俗資料館 学芸員

大谷大学真宗総合研究所 研究補助員、大谷大学研修員を経て、2012年4月より現職。中世における仏教教団史が主たる研究テーマだが、明治期の真宗寺院再建史や近代の真宗大谷派学事史に関する論文も執筆。資料館では文献史料を担当。

■佐藤優香 東京大学大学院情報学環 特任助教

国立民族学博物館講師、国立歴史民俗博物館助教を経て2012年より現職。専門は学習環境のデザインと博物館教育。博物館におけるコミュニケーションについて歴史と実践のふたつの手法で研究。博物館や小学校におけるワークショップやコミュニケーションのためのツールを多数デザイン。

■武井二葉 大東市立歴史民俗資料館 副館長

美術史を学んだのち、博物館・美術館教育を専攻、博物館・美術館にて実践を重ねる。2009年より大東市立歴史民俗資料館学芸員として勤務、大阪経済大学非常勤講師（『博物館情報メディア論』『博物館展示論』）を経て、現職。

■大野木啓人 京都造形芸術大学 副学長

専門は、空間演出デザイン。1967年から個展、公募展、グループ展で彫刻作品を発表。1972年からディスプレイの仕事を中心に立体造形を担当。1983年三宅一生『ボディワークス』で人形製作を担当。以降、ファッションデザイナーと組み、多くの新しいマネキンを発表。美術館の企画展でアートディレクションや会場構成なども手がけている。

謝 辞

【機関・組織（五十音順・敬称略）】

赤井自治会、赤井消防団、江ノ口北若中地車会、江ノ口南若中地車保存会、大野地車保存会、押廻地車保存会、雁屋地車保存会、北野会、北之町地車保存会、京都造形芸術大学、京都造形芸術大学大学院、御領地車保存会、四條之町地車保存会、下野地車保存会、下野地車若中、新田地車保存会、住道青年団、大箇だんじり会、太子田地車保存会、龍間自治会、谷川地車保存会、辻之町地車保存会、寺川地車保存会、中垣内地車保存会、中之町地車保存会、奈良大学、西ノ口若中、西諸福地車保存会、野崎第一地車保存会、野崎第二秋祭実行委員会、灰塚だんじり保存会、東之町地車保存会、東諸福地車保存会、氷野北野神社奉賛会、氷野地車保存会、平野屋地車保存会、深野北地車保存会、深野西若中、奉賛会（御供田）、朋来地車保存会、南新田・元町青年団

【個人（敬称略）】

西俊三

◆本事業は文化庁「平成 27 年度文化芸術振興費補助金（地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業）」を得て、実施したものです。

◆奄美豪雨により被災しただんじりの調査ならびに整理につきましては、京都造形芸術大学保護者会「蒼山会」の研究助成金により実施しました。

文化庁平成 27 年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
だんじりを活かした地域共働事業報告書Ⅱ

「だんじりの記録・だんじりの記憶」

発行日：平成 28 年 3 月 31 日

編集発行：だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

事務局：大東市立歴史民俗資料館